南園會報

會報部

第九號

山口縣萩高等女學校

南園會報第九號目次

○口　繪　本校生徒水泳教授の光景

○教の園　（一頁）

毛利男爵閣下講話

女子の任務　文部省督學官　西川順之氏

河内陸軍中將閣下講話

生活改善に就て　客員　堀江ウタコ

○文の園　（三頁）

蕨取に友を誘ふ文　實一　下井志都子

阿武川を眺めて　實一　横山アサ

我校創立記念日　本三　石川ツル

初夏　本三　堀トキ子

初秋の朝　本三　羽仁素子

元旦の朝　本三　小川ミツ子

時雨の一日　實三　岡イセ子

秋の夕　實三　井本捷子

田舍の冬　實三　田村富貴子

初夏の一日　本四　齋藤貞子

永久に忘れ得ぬ友　本四　久保田花子

運動會の記　本四　椿マス子

玉木病院參觀の記　補習科　塩見愛江

修學旅行の記　補習科　岸緑

修學旅行の記　本四　大和直子

和歌　三十三首

俳句　百一首

○本校記事……（五〇頁）

○本會記事……（五七頁）

○校外會員消息……（六二頁）

○篤志者芳名……（六四頁）

○會員名簿……（六六頁）

本校生徒水泳教授の光景

山口縣
萩高等女學校
南園會報 第九號

教の園

毛利男爵閣下講話

本年五月二十日、男爵毛利五郎閣下御來萩の際、校長の懇請により特に來校の上生徒に對して講話せられたる要領なり。（文責在記者）

予は、本校に來りし事數回あれども、講話をなす事は今回を以て始めとす、予は創立の際より特別の緣故を有する本校に於て講話することを欣ぶ、依りて今日は女子敎育に關する一端を述ぶべし。

女子の敎育は昔も今も良妻賢母主義なるべき事には相違なかるべし即ちよく夫に事へよく子を育つる人たらしめんとするの趣意に於ては相違なけれども其の內容方法に於ては相異なれり。これ世界大戰の爲め世態の大變化を來したると我國の地位が進展したることなどに依るべし。今後の婦人は唯々內に在りて主人を助け裁縫料理等をよくするのみにては不充分なり。世界の大勢思想の推移等も大体は了解し居らざれば人の話を聽きても斯聞を讀みても了解の出來ざる事多かるべし。即ち一般的新智識を修め常識の習得に努めざれば夫婦相調和して以て內助の功を全ふする事能はざるべし。本校の如きも最初は實科高等女學校にして實地を主とせしが今は時代の趨勢に應じて本科を主とする事となれり。子女を育つるにしても頭が古ければ子女より輕んぜらるべし。今や敎科書の記事にても時代を追ひて新らしくなれり。英語にても年毎に新語が出來す。

又英國にせよ佛國にせよ、自國の語中に他國の語其の儘を話すことあるが如く、我國語の中へも英語を交へて用ふこと多きに至れり。故に從來學びし事を忘れざると共に此上に新智識を增す樣にせざれば子女の學科の豫習、復習を指導する事も能はずして爲に輕侮を招くに至るべし。又子女が中等教育に進む頃は恰も主主人は世話盛りにして用務の多き時期なり、此際に至れば主婦が全責任を以てよく子女を監督して教育することを必要とす。斯の如く、幼き子供のみならず中等教育程度以上の子女を教育することに於ては主婦たるもの層一層修養に心掛け、時代に後れぬ樣にすること肝要なり。すべて基礎の智識をつくるには學校在學中に於て勉強すべし。新智識を補足するには或は書籍、雜誌、新聞等を讀み名士の講演を聽き有益なる事物を觀察する等よろしく知識の收得に趣味を有して進取的にすること肝要なり。

次に生活難と婦人の獨立問題につきて述べん。婦人は必ずしも家を持つへしといふにはあらず。時世の變化につれて或は學者となりなどして遂に家庭を作り得ざるものもあるべく、生活難のために家庭を作り得ざるものもあるべし。婦人は家庭を作ることを本體とすれども、將來或は種々の事情により家庭を作り得ざるもの增加するに至るの傾向なしとせず。假令家庭を造れる婦人にても、此の生活難の世に於ては主人に事ふる暇々に於て、何か獨立的の仕事をなし、以て生活難を救ふこと必要なり。婦人は正直にして比較的少額の報酬を以て業務に從事せしむることを得るに依り、現今は遞信省、郵便、電信局、鐵道省、諸會社等に事務員として從業する者多くなれり。これ國家のため實に慶すべきなり。しかし之が爲めに子女の教育を忽せにし親子の愛情を薄くする等の憂なきにしも非ざれども、これ時勢の推移上已むを得ざることなり。然れども之れは保母の選擇其他の注意によりては其の弊の幾分は救ひ得らるべし。

兎に角、家庭を作らざるに先ち、若しくは家庭を作りたりとするも、比較的家事の煩雜ならざる時代殊に元氣旺盛の時代に社會の業務に從事し、家計の幾分を助け、其の餘裕を貯蓄する心掛なかるべからず。斯くて子女が中等教育を受くる頃に及ばゞ母たる者は既に體力も氣力も稍々衰へて事務を執るにも幾分か能率を

減するに至るが故に、其の職を辭して專ら家庭の人となり、子女の教育に盡力するを可とす。

抑も婦人が獨立の事務に從事することは一朝有事の際に於て男子に代りて事務を執るにも必要なり。事務のみならず、腕力、體力を要することも、女子に於て擔當するの要あることは、今回の世界大戰に交戰國婦人が活動せしに徵しても明かなり。斯ることは急速には出來難し。前以て經驗しおくの必要あるべし。

近來女權擴張など唱道して騷げる新しき婦人あり。歐米にては婦人參政權を唱へて大騷ぎせしも、其の結果米國に於て唯一人の婦人議員を選出したるのみ。餘りに空騷ぎなりしなり。日本は西洋と其國情を異にす。參政權などいひて騷ぐよりは家庭生活若くは官廳會社の事務員及學問研究等につきて大に活動するの優れるに若かざるべし。

日本婦人は家庭の經濟に關する考への少き者多し。婦人は一家の收入を本として豫算を作り、一家の體面を保つ上に己むを得ざる費用は、之を豫算に編入するも、苟も虛榮的に屬する費用は決して編入せざる樣にすべし。

次に身體の强健に注意すること大切なり。身體强健ならざれば良妻賢母として活動することも能はざるべし身體は鍛練すべきも無理なることは慎むべし。往々婦人には身體に無理なることをも敢てするもの多きが如し。彼の惡性感冒流行の際に當りて統計上婦人の死者多かりしは、偏に家庭の境遇に依り病氣に罹りながら無理に家事に服し、且は身體の孱弱なりし爲め終に病氣に打勝つこと出來ざりしに見ても知らるべし。常に體育てふことに注意すべし。體操時間には大に元氣を出して行ふべく、力の入らぬ體操は何の價値もなし。精神上の體育といふこと甚だ大切なり。競技に於ても猥りに勝敗のことにのみ腐心せずして、體育てふ事に注意を拂ふべし。體育のことにつきては述べんと欲すること尙多々あれども、今は時間の不足を遺憾とす。

要するに、第一良妻賢母、第二婦人の體育につきて所思の一端を述へたり。諸子宜しく國家的に奮勵努力せんことを望む。

女子の任務

文部省督學官　西川順之氏

本年六月六日　西川文部省督學官、本校視察の際、十餘分の時間を割きて生徒に對し講話せられたる要領なり。（文責在記者）

女子の任務としては、子供を生み之を養育すること勿論なれども、尙其の上に本當の人間を作ることが大切の任務なり。子供は學齡に達すれば、學校に入りて夫々教育を受くれども、其は一日中の僅少時間に過ぎずして、大部分は家庭に於て親の教育を受くるなり。學校の力にて及ばざる所は家庭の教育力に俟たざるべからず。而して家庭に於ける教育の主たる地位に立つものは母なり。

我國にては古來女子は無能なるが如くいはれたり。成る程体力知力に於て男子に劣れる樣に見ゆれども、之をよく教育する時は隨分上達せしなることを得るなり。されば其の素質に於ては男子と大差なかるべしと思はるゝなり。

男子には高等教育の機關あれども、女子には高等女學校より以上の教育機關は殆んど無しといひて可なるべし。されば諸子は現時に於ける女子教育の最高機關に於て教育を受けつゝあるものなるが故に、將來大に奮勵して女子の任務を全うする樣力むべきなり。

歐洲大戰以來我國の任務益々重大となれり。將來其の大任を肩負ふべき國民を養成する女子の任務は甚重大を加へ來れり。諸子よろしく先生の教訓を守りて修養の功を積み、やがて其の大任務を全うせんことを心掛くべし。

河内陸軍中將閣下講話

陸軍中將河内信彥閣下は萩町江向の出身にして一昨年來港せし際第二艦隊旗艦長たりし、勝木源次郎閣下（今海軍少將）の令兄なり展墓のため歸鄉されしを幸ひ七月十六日特に請ふて生徒のため講話されたる要領筆記なり。（文責在記者）

私は本校創立以來初めて參りまして設備のよく整頓して居るのに感心しました。又南園御殿を見て懷舊の念に堪へませぬ。私は女學校でお話する事は今回が初めであつて好い材料を持ちませんけれども校長より何か話せよとの事故、所感の一二を述べて見ませう。

現今多くの女子は美しい裝をすることに頭腦を惱ます樣である。東京に於て私の宅の近傍にも多くの女學生が居るが体格と云つたら吹けば飛ぶ樣なのが多い。それが又白粉や紅を濃くつけて華美な衣服を着て輕薄な態度をして居る。然るに諸子は一般に体格が丈夫さうであり、身なりも餘程質素で、態度も落附いて元氣に富んで居られる樣に見受られる。實に悅ばしいことである。質素ですますといふ事は將來家庭を持つてからも、單に自身の幸福のみでなく實に其の家の幸福である。

それから此の萩地方一般の人の欠陷は、共同心に乏しい事であるが、此の共同と云ふ事は、家庭から考へても國家の上から考へても甚だ大切な事である。彼の表面では良い樣な風をして居ても、蔭では人の惡口を云ふなどは共同心に乏しい事から起るのである。そんな人達が家庭を治めて行つても、圓滿は得られない隨つて國家に對する精神も乏しい樣になる。氣をつけなくてはなりませぬ。夫れから、皇太子殿下御渡歐に關しての活動寫眞は當地ではまだ觀られないさうですから、私が先日東京で觀て特に感じた事を話しませう。映寫場たる慶應大學三階の大講堂へ集つた二千五百人許が開會の初めに當り、老幼男女を問はず一齊に起立

して君が代の唱歌を合唱した、實に莊嚴の感に打たれました。それから映寫に移つて、殿下の東京驛御出發や横濱御着及び御乘艦の模樣から、御召艦香取に皇太子旗が揭げられたのが次第〳〵に沖へ向つて出て行く有樣などが明らかに美しく映じ出されました。

英國ポーツマス港へ御着きになると彼の有名な「ネルソン」の乘つて居つたと云ふ由緒ある、古形の軍艦が迎へに出て禮砲を發した。英國皇太子殿下が歡迎のため御出でになつて握手をなさつた。恰も日本と英國とが手を取り合つた感じがして感激の涙が出た。倫敦へ御着になつて英國皇帝陛下と御對面あらせられ、御同列にて御閲兵あそばされた。其の時英國皇帝陛下は先に進まれ、我皇太子殿下は其の後について進まれましたが、皇帝陛下にはしきりに後を見返りし〳〵て、我皇太子殿下をかばひ乍ら進まれる有樣は、丁度遠方から歸つて來た子を、親がいたはる樣な如何にもお親しげな風が見受て嬉しふありました。

殿下が倫敦の宮殿へ御出になつた時、皇帝の篤き御思召で、在留日本人を宮殿に最近い場所の道の右側へ集まらせて歡迎をおさせになつた。其の多數の日本人が手に〳〵日本國旗をうち振りて歡迎するのを見るとまことに嬉しかつた。

我國皇太子殿下の御渡歐は始めての事ですから到る處盛んな歡迎會が催された。殊に倫敦に於ける歡迎は非常に盛大で多數の方の集まりであつたが、殿下には少しも應せらるゝところなく立派に應對あらせらるゝ有樣は、實に御偉い事であると感心しました。

もう一つ皆さんに是非記憶していたゞきたい事がある。それは明治天皇樣の御聖德の事です、先年私が旅團長時代に奥村侍從武官を訪問した時、同氏は小さき桐箱を恭しく持ち來りて之を示さる。鄭重に頂いてどんな立派なものがあるかと、中を見れば豈圖らんや鉛筆の使ひさしの長さ二寸位のものであつた。質も普通の學生用位のものである。同氏が說明せらるゝには「嘗て先帝陛下の御前で仰せを承る時其事柄を忘れないために筆記しておかうと思つて手帳を出したが鉛筆がなかつた。これはと思つて困つて居る所を陛下は御覽じて、陛下御自らの御手帳の鉛筆を御取出し遊ばして御貸下げになつた。私は之を拜借して筆記を濟し御返上する際、誤つて床上に取り落したので、これはと思つて躊躇して居ると、御附の方が「それは御戴きなさい」と注意されたので恐懼して頂戴いたしました、其鉛筆がこれですとのことでした。私はこの鉛筆を拜見し又其の說明を聞きまして、まことに恐れ多いことに存じます。皆さんの机の隅には二三寸位の鉛筆が何時も、ごろ〳〵して居る樣なことはありませんでせうか、陛下でさへ鉛筆があんなに短くなるまで、而も普通の品を御用ひあそばしたのである。況して私共に於ては大に考へなくてはなりませぬ。

又先帝崩御の後、玉体を奉安せられてあつた御殿を拜觀した時、其の御障子の紙が切張りしてあつて、其色が五色位の區別がついて居る。これは破れるに從つて其所ほどを繕はせ給ふたのである。其の御質素の程感涙を催すの外なかつた。我々が華美な風をしては實に先帝に對し奉つても相濟まん次第であります。

女子の修養も、知識道德の方面のみでは足りない。大に体格をよくしなければならぬ。徵兵檢査の時に調べて見ると丈の低い人は大概其母親が低い爲である。女子の体格を好くすることは非常に大切である。

諸子は健全なる身体と確實なる精神とを養成してやがて家庭の主婦となりて大に勵まれる樣に切に希望する次第であります。（本四、大藤アイ　鉛川ヒナ筆記）

生活改善に就て

客員　堀江ウタコ

世界の大戰亂も漸く終局を告げ、日本も世界の大舞臺に立つて大いに活動の範圍を廣めなければならない立場となりました。世事多端の此の秋に當り、複雜な生活、多樣な形式を止して意義ある簡單な生活に移らな

ければなりません。而して此の生活の大部分は家庭生活である。隨つて先づ第一に家庭生活を改善しなればなりません。之は家政の中心たる主婦の責任であります。只今の吾々の生活振は、燈火に譬へれば恰も「ランプ」時代の生活で、舊式であつて現代式でない、不便利で、不衛生、不經濟、實に時代遲れの感あるを免れません。唯スキッチの接離によつて燈を點消し、簡便で、衛生的、經濟的な電燈の如き合理的な、しかも明るい生活の時代を出現せしめなくてはなりません。

偖而其の改善すべき要項を具体的に申のべて見たいと存じますが、衣食住禮儀作法の各項目に亘つて悉く述べることは紙面が許しませんので、其の内重要と認める事項を思付次第書きつけて見ます。先づ第一に食事であります。日本食の御飯の炊方などに至つては實に多大の時間と、勞力と、費用とを要します。假に七時の自働車に乘る人があると言ふと、主婦は四時頃から起きて朝飯の用意をすると言ふ有樣です。之を西洋の風の麵包に改めたら如何でせう。一週間分も一度燒けばよろしい。それに牛酪とジャムがあれば朝食等は容易く出來ます。而してその麵包の滋養量と言ひ、消化の易さと言ひ米に優ること數倍でありまして之が生活改善の第一歩でなければなりません。尙ほ今までの滿腹主義を止め保健食料による献立を調製し國家食料を無益に費さぬ樣にしたいものだと存じます。

第二住居の問題でございますが、日本住宅は不便利、不經濟、不衛生な所が少くありません。譬へば日本の障子にしても實に手間がとれます。或る西洋婦人が日本人に聞いて言ひますには「障子はどうして掃除しますか」ときゝました。すると日本婦人答へて曰く「一窓一窓塵拂と云ふものではたきます」と西洋人「如何にも手間のかゝることでせう」と。のみならず塵埃を空氣中に舞たゝせて其中で呼吸し其埃は掃除の濟む頃再び元の位置であつた、障子の格子へ還つて來ます。又雨がふれば破れる實に困つたもので御座います。かゝる故をもつて硝子窓にしたならは、大變便利ならんと存じます。次は疊を廢して座することを止め、テーブルに椅子式に改めたいと存じます。疊は隨分不潔であり汚物を吸收し黴菌を宿して居ります。其上一枚に要する費用も仲々大したもので御座います。坐することは不衛生で日本人が座するために身長が短くなりますのもこれに原因致します。椅子テーブル式の便利經濟衛生的なことは申すまでもありません。間取の如きも從來の玄關から客間と言ふ仕方でなくて玄關兼應接室として、面會すると同時に、直に要談をすませることの出來る樣にしたいものでございます。宴會の席も無論卓子と椅子とを用ひて、從來の据膳を廢し女給仕を止めたならは席の亂れることもなくてすむことゝ存じます。

第三衣服の問題で御座います。

住居が改善されますと如何しても衣服の改良をさけばねばなりません。あの長い袖、あの廣い帶、あの前廣がりの衣服は改良住宅には似合ひません。古來の傳統と申しながら不便利で、不經濟、不衛生で御座います一足飛に西洋服にせぬ迄も筒袖に袴を用ふれば運動に便利で用布の點に於ても頗る經濟につきます。所謂改良服の如く上下同じ地質を用ひるので、殊に小兒の服裝は是非之に改めたいもので御座います。而してこれは日本服と兩方拵へるのでは無益で朝夕用ひなければその効果は無いものと存じます。然し若き婦人に筒袖に袴を家庭にて用ひらるゝ樣御薦めしても、とても實行の出來るものではありません。人は美を好みます。日本人の目から見ますと日本服も、なか〳〵美と見ねるところもなきにしもあらずで御座いますが、文明國人の目で特に帶を背に高く結びたる等を見ますと如何にもおかしく感ずるでありませう。されば急に走らず徐々に歩を進め日本婦人の自覺により改良服の長所を見出す樣に一時も早くしたいもので御座います。かく皆の婦人の賛成を得るにはどうしても日本人より見ても審美的の滿足を意味するに足るやうに尙經濟につくものを製作せねばなりません。また日本婦人は衣服の多きを誇り、甚だしきに至つては其の多寡で人物の價値を定めたりなどします。結婚に際しても財産身分に關せず高價なものを多く求め、之を人に見せ、又は箱笥の中に收め置き、まるで寢せ金として誠に無益の事が現に日々行はれて居ります。實に經濟思想に乏しい人達と言はなければなりません。若し小供の可愛さのためとあらば之を金錢にて與へなば、如何に有益なる

ことで御座いませう。今春東京に於て文部省開催の生活改善講習會がありました時、皆で話しあつた所によりますと先づ年收の三割位が相當で例へば千圓にして三百圓位を結婚費とすればよからうと云ふ話で御座いました。かくの如く改良事項は色々で御座いますが、目下日本服改善を急務と認められ實行の容易いものは下ばきの改良でございます。之は憚る事で御座いますが日本婦人ほど不用意な下ばきを着けてゐるものは御座いません。勿論外出もせず屋内で端座して居る舊風の淑女式でしたらいざしらず、新興國の婦人はどうしても、外國なみに活動的に進んで勉強もしなければならず、職業に就かなければならない時代ですから、自然外出も頻繁となり立働きも多く椅子にでも長くよつて居らなければなりません。其際下半身の冷ゆる樣な在來のものはよろしく御座いません。又思ひがけない禍に出くわさないとも限りません。之はどうしても西洋婦人の如く、猿又股引の類を用ひることに改良したいと存じます。

かくして内部より漸次外部に及ぼす樣に改良すれば、餘り不平なく實行も容易かと存じます。小學校や女學校に行はるゝ運動會のリレー競爭等に於て、不作法なる醜態もこの改良さへすれば活潑に運動も出來る樣になりませう。其他改善すべき生活事項は澤山ありますが、時間の尊重も大切なことであります。日本には到る處に名を冠した時間と云ふものがあります。萩時間、山口時間といつて居ります。先達の時宣傳もありましたが、今に時間の觀念が不正確で浪費が多いので御座います。招待するに一二時間の掛値をし、招待される方は無論一二時間遲れて參ります。之は文明の機關の備はらない田舍丈甚しいのであります。汽車、汽船、電車等の交通頻繁の都會地の人は若干此點に進歩して居ります。訪問時間の如きも相當の考慮を要する問題で御座います。食事の前後各一時間を遠慮し訪問したならば、四方山の話を止して直ちに要談をすると云ふ習慣に改めたいもので御座います。東京等でも追々實行されて參りました。西洋では訪問を受くべき時間を定めて居ます。かく改善が實行されたならば主婦は多くの時間と、勞力と、金力との餘裕を見出すで御座いませう。それを有益な修養と讀書と子供の教育に使用し、主人の職業に内助に資するのであります。從來子供が小學校から、中學校や高等女學校と進むに從ひ、母たる主婦を輕んずる風があつたのは主婦が常に洗濯と、裁縫と、炊事とに忙殺されて更に自己の修養をなさず、時勢の進運に遲れ勝ちで其の日〳〵來る新聞すら碌に讀んで居らぬことに基因したのであります。猶改善の餘地は我が家庭生活丈にでも隨分澤山見出し得られるのでありますから、お互に研究の歩武を進め實行して其の成績を擧げ個人の進歩、家庭の進歩より引いては國家の進歩發展につくしたいものであると存じます。（完）

明治天皇御製

馬上紅葉

鞭うたば紅葉の枝に觸れぬべし
こまをひかへむ岡ごへのみち

霜

賤が家の軒端にたかく積上げし
にひわらしろく霜降りにけり

文の園

蕨取に友を誘ふ文

實科第一學年　下井志都子

敏子様　あの美しかつた櫻花も今は綠の濃る様な若葉となつてしまひました。でも櫻に變つて橙花今綻びんとして新綠の若芽より白い顏を笑んだ様に中々櫻にも劣りませんね。

敏子様一昨年の此の頃を思ひ出しましてね。樂しかつた愉快だつた、あの山登り、私もう急に山が慕はしうなつて心はずん〳〵高く登つて行く様です。始めて蕨を取りなすつた時のお顏、今私の眼の前にありありと浮んで參ります。なんと悅びに滿ちたお顏だつた事でせう。まだ行かぬうちから、一昨年の事を思ひ出しては、あの山登、又行かんとする道中を想像しては、獨り樂しい思ひに耽つて居ます。丁度明後日が日曜です。此の向なら今日以上の上天氣だらうと思はれますので、一昨年より尙一層樂しく愉快に一日を過さんと存じます。

敏子様、日頃からの御精勵故、日曜日には余り變つた御用事はないで御座いませう。おづるの私、用事は山程ためて御座いますが折角の思ひ立ち用事は忘れて、止めようとしても止められぬ私の心に御同情なすつてよ……左様なら。

阿武川をながめて

實科第一學年、横山アサ

嗚呼、阿武川よ、阿武川よ。清き流れの阿武川よ。私のすきな阿武川よ。作文帳を手にした私は、此の阿武川を眺めて、かうさゝやいた。今私の身は運動場の上の土手に座を占めてゐる。數ある物の中で、最も目に入るものは唯此の阿武川のみ。降り續きし梅雨は名殘なく晴れて、そよ〳〵と吹く初夏の涼風に、阿武川の水面は小波をたてゝ居る。と遙に見ゆる川下より、帆かけた舟が一艘、此方をさして走り來る。水の面にうつる四方の山々、實に景色がよい

私は木筆走らす手を休めて此の阿武川に見入つた。川も私が目についたのか、その愛嬌の滴る如き眼を以て、私を見てゐる。初夏の涼風はそよ〳〵と私の身邊を取りかこんだ。私はつかれた手を休めて微笑んだ。

我が校創立記念日

本三　石川ツル

霞が俄に靄とかはりだん〳〵深くなると思ふと、霧の様な雨が、しと〳〵と降り初めた頃學校へと急いだ。四月二十二日實に今日は我校の創立記念日である。けたゝましい鐘の音は校庭のすみまで響き渡つた直ちに控所に集つた。朝禮も事なく濟むと一同講堂に集まつた。校長先生より我校の創立當時より現時に至る迄の沿革について次のお話があつた。

吾が校は明治の大御代四十五年に創立されたもので當時迄は當地に女學校は無かつたが、郡會に於て相談せられ、當時本郡長の松浦誠氏に建議されたところ、氏は直ちに之を採用されたので瀧口、增山兩氏は彼方此方と奔走され、當時兵庫縣の富豪久原氏に事の由を告げらるゝと心地よく承諾され、創立費の全部參万圓を寄付されたので土地は舊南園御殿の跡を萩町に買受け、此地に設立されたのである。其後再び久原氏に請ふて昨年理科室を建てられ、今年は又新校舍三つ設立される狀況に至つたのである。かゝる完全な學びの園にいそしんだ皆さんはます〳〵よく勉勵せなければならぬと、實に私共は幸福なものである。以後一層勉强せねばならぬ。と吾人の覺悟についでも色々と訓諭された式後今日を記念するために一同松本の松陰神社に參拜した。どんよりと曇り勝ちな空に銀糸の様な春雨が、しと〳〵降る中を長蛇の様な我が一隊は八丁筋を正直ぐに進んだ。やがて土原に出た、路の兩側は靑々とした麥畑の所々に黃白の菜の花が毛氈を敷いたように咲き亂れてゐる。雲雀は高く雲井に囀り遠方近方に草取りの小女の白手拭がちらほらと覗ゐる長閑な平和の春を歌ふ諸鳥の音も微かに聞ゑる。暫くの間雨中を進行を續けた。大分雨も霽れがゝつてきた、表に所々に乾した傘から湯氣がたつてゐる。やがて目的地についた

一同神前にぬかづいた時、そゞろにその昔を追懷する情に堪へなかつた。神社の境内に在る松下村塾寶物庫米搗臼等はいづれも先生の歴史や當時の世の中を語つて居る。六十年前憂國の餘り米艦に乗り込み、遠く海外に遊び我文明を進めようとせられたが遂に其志を遂げられず、刑場の露と消ゑられた御靈は此の神殿の奥深く眠りますのであらう。參拜後山上の先生の誕生地及び母堂瀧子刀自の御墓に急いだ雨上がりの柔かな赤土の上を踏んで行く中に、さら〳〵とやさしい、さゝやきをたてゝせゞらぐ小川の水音は絶ゑずゆれてゐる。水に映つてゐる白雲がゆる〳〵と川を遡る。大分肌が汗ばんできた。爪先上りの山路を辿りやう〳〵先生の誕生地についた。雨後の青い山、霞んだ森、麥畑、菜の花畑に憩つてゐる農夫、見渡す限りの人家が、晴空の下に見ゑる。やがて御墓に詣でた。小高い岡の上の青々と苔むせる御墓の奥深くで、幾年昔に不歸の客となられた刀自は夢見られるであらう。私共の手向けた香の煙細う立つてゐる。それより一同下山した。柔らかな春草をさく〳〵と踏んで歩く、朝露が足にしめつて何となく心持がよい。歸途松陰神社にて一同解散した三々五々樂しい友と腕組んで寛ぎ〳〵家路についたあゝ思ひ出ゑき此の日、何時までも記念すべきである。

初夏

本科第三學年　堀　トキ子

あはれいつまでもと、いのりける九十の春光も、夢の間に過去りて、今は我等の最も好める初夏の時節となつた。

卯の花は垣根に匂ひ、時鳥は忍び音をもらし、木々は見る目も心地よく、四方の景色は春におとらぬ眺めである。やがて五月雨も來て霧れつ降りつ、陰雲にとざゝれて、鬱陶しい心に自然陷り安い時であるされど苗を植ゑ付くる大切な期で、この雨期の丹誠にて秋の收穫も得らるゝのである。實に働くべき時である。

夜は千點萬點暗をも縫ふて飛び交ふ螢も愛らしく、扇子片手に川邊に行きて螢追ふも、面白いものである。

初秋の朝

本科第三學年　羽仁素子

蟬の聲が絶ゑてから、朝夕が餘程涼しくなつた。裏の方へ出ると、稍々冷い風が心地よく頬をなでる朝風に吹かれると、頭の中がはつきりして誠に氣持がよい此の間迄で美しく咲き揃つてゐたダリアもも う見る影もなくなつた。それに引きかへて、左側のコスモスは赤、白、桃色と色もとり〳〵に咲き初めまことにやさしく愛らしい姿である畑のすみの、とうがらしがさも誇らしげに、紅い長顔を出してゐる傾きかけた小芋の葉には、丸い露の玉が轉がつてゐて、それに朝日をうけてさながら寶玉の樣である。

近所の農家の裏に、竹垣がこはれてそこから玉菊小菊等がほゝ笑んでゐる。道路に出ると右側は廣い田で、稻も大分色づいて重さうに頭を垂れて、朝風にゆらり〳〵靡いてゐる。道傍の草は夜露でしつとりと濡れて、素足にあたつてひや〳〵する。道に沿ふて小川が流れてゐる。水は餘程よく澄んで、其中を目高の一群がすう〳〵と登つて行く、川の兩岸の石垣からかわゆらしい野菊が流れ行く水に己が姿をうつしてゐる。時々稻の中から群雀がぱつと飛びたつて人を驚かす。大分行くと左右の木立で日影になつた所がある。茂つた叢から鈴虫、松虫其他名も知らぬ蟲がすゞしい朝の音で秋を語つて居る。やがて玉江川に臨めばいつもに變りなく、ゆるり〳〵と平和な音調で流れてゐるが、どこども知れず水の色にも秋の色が漲つて居る。

元旦の朝

本二　小川ミツ子

曉告ぐる勇ましき、鷄の初音に暖かき夢路破られ

て起き出でぬ。

いでや若水汲みに行かんと輪飾りせし新しき手桶片手に裏の井戸に行く、釣瓶に手をかけふと下を見おろせば、去年の名殘の月影淡く、曉前の光はかなき星の影二つ三つ小暗き水の面にうつりて幽かに打ちゆらめき底より吹き上ぐる風いとつめたし。心締むる樣なる冷さ忍びて口嗽ぎ手洗ひ身を淨め、初日の出拜まんには早けれども閉したる門の戸開けば程近き前面の海原掠めて吹き來る風は身にしみて快し

去りにし年の昨日まで、專に逝く年に名殘を惜みたる遣る瀨なき寂しさも、今朝ははや心の中にその片影だにとゞめず、耳目に觸るゝもの悉く改まりたるが如き心地して唯わけもなく悅びの微笑の上るを禁ずる能はず。目前なる門松の綠さへ一入深う覺ゑられて風の音づるゝ度毎に床しき綠の香の衣袂近う迫り來るが如くに感ぜらるゝ等得も云はれずなん軒に連ねられし注連飾りのさらさらと音立てゝ搖ぐも嬉し。

筋向ひなる大杉のこんもりと小暗き迄に茂り合へる社の境内より朝の清き空氣をふるはせて澄み切つたる拍手の音高く響き來るは誰が人の初詣したるにや。

啞々と鳴く一聲、尙明けやらぬ東雲の空を隣家の棟近く黑き鳥の影一つ行き過ぎたるは夜の明くる兆しなりけん、やがて東天一帶に白みて邊の雲は徐々に色を變じつゝ遂に白熾熱とも覺ゆる一條又續いて二條、三條天を射るよと見る間に我幾數千の金縷の征矢の一齊に登りたる初春の曙光は芽出度君が大御代に照り映ゑぬ。あゝ嬉しきかな此の朝賀に尊きかな、此の瞬時。

時雨の一日

實三　岡　イセ子

外には銀糸の樣な細かい雨が、しと〳〵と音もなう降り灑いでゐる。しんとして物音一つも聞ゑない今朝の自習時間、誰も試驗のおさらいにペンを走らせたり書物の頁を繰つたりしてゐる。ふと私は今まで目通をしてゐた。地理書をそうとふせて、硝子越に外を見やつた。小さい〳〵白い沫が中庭の眞萩にも竹の葉にも、又は藤棚にも、所かまはず一樣にかゝつて居る。今朝は雨の爲に誰の手にもかゝらない落葉が、濡れた土の上に數多く散つてゐる。そしてふと紅葉した楓が、ヒラ〳〵と二つ飛んで悠やかな雨水の流れに重つてツイと落ちた。

「龍田川からくれなゐに水くぐるとは」と百人一首の句を吟んで一人微笑んだ。龍田川でなくつて井戸の方に流れてゐるのが黃河、杉の木より、梅の木までのが大きいから楊子江、萩の下路より未枯れたコスモスのあたりのが黑龍江であらう、それにしてもさて支流の松花江がないガンヂス河は何處であらうかなど、目を見張りながら亞細亞州の河川を中庭に畫きながら、今日の試驗を氣にしてゐると其の途端朝禮の鐘がチンチンチンとけたゝましく響いた。

まだ降りみ降らずみ時雨れてゐる。

（本校生徒放課時間中の運動）

田舍の冬

實科第三學年　田村富貴子

ビューと一吹きの風、やはり木枯だ。思はず首を縮めてしまつた。眞赤な椿がぽつたり深い霜の上に落ちた。かうまで寒くては聊か南國が羨ましい、足にあてると凍みついて痛い庭下駄を、からり〳〵と裏に出た。往來には白い息を吐き乍ら通る人が垣越しに見へる畑の中をずん〳〵と通りぬけると、日頃でも寂寥な田舍だのに冬だから一そう淋しい。一面に田園だが麥も今一寸芽を切つたばかりだ

家のまはりを縫ふ様に流れる、此の小川の水も肥
なので、底の石も數へられその水晶の様な水を見つめると、尙一きはの寒さを覺える。一面に散り去つてしまつた木葉が、から〳〵と風に舞つて居る。籌を倒にした様な木ばかりだのに、中に二三本程の松が見てるが、流石に常綠木で、冬も知らない様であるけれど、其の隣の柚の木には只一つの實が黃色になつて殘つてゐて、さびしそうに四方を眺めてゐる。農夫に取り殘されたものらしく見える。高い〳〵柿の木は一面に白い幕を引き廻した程に、大根が懸けてある。澤庵の代らしい、横の破屋の椽に風流めいた老人が寒菊の鉢をしきりといぢつてゐる。咲いた花もあの翁の丹誠らしい。畑では大根や葱が緣を飾つて青々としてゐる。

若い農夫が二人現れた。何するだらう、見守ると畑に入つて大根を拔いて、四五本大きいのをこちらへもつてくる。後から可愛いチャボの雌雄がついて出たので、一人が足で追ふと驚いて又藁屋の中に入つてしまふ。

やつはりチャボでも冬は寒いだらう。農夫は冬の代裝者の様な活氣の大根をもつてくるが、一体何の用で來るのかさつぱりわからない。だん〳〵近よつて來る。おかしな事だわいと思ふと、農夫は「お寒う御座います」と私も思はず「お寒う御座いますチ」と返した。少し川下へ行つて並んで大根を洗ひ始めた。なるほど大根洗ひに此の川に來たのであつたとはじめてわかつたお晝に炊くのかしら、町へもつて賣りに行くのかしら、町にしてはあまりに少い、多分お菜に炊くであらうと、これまで考へて仕舞つたチャブ〳〵と時々、微かな音が聞える。

其手があの軒につるした唐がらしよりまだ〳〵赤いさら〳〵と小さき流れに大根を
洗ふ手先のいとあかきかな

やがて洗ひ終へた。何か語り合ひ乍ら歸つてくる。私の前で女の人が微笑し乍ら「これをお晝にお炊きあそばせ、まづうございますが」と大きな大根を二本出した。

「どうもありがたうさまでした」と、無雜作な禮を言つた。

農夫の歸るのを見守つて、早く家に歸つて此の由を話さうなど考へて一寸ぼんやりとしてゐた。と後に鈴の音がしてくる。振向くと可愛いジョンが尾を振つてくる、喜んで手に抱いた「よく此處まで來てくれたのネ」と言つて大根とジョンを連れて、又元の細道を通りぬけると、風が一時に吹いて寒く縮んだぼたり又前の椿が地上に落ちた。

秋の夕

實科第三學年　井本捷子

「一」

今し月は　東山に昇りぬ
キ…リリ…リ…リリン　更け行く秋に
人の愁を織る　虫の音湧きぬ
折しも山寺の　雛僧が撞く鐘か
細ふ〳〵たゆたひ勝ちに　響は行くよ
あゝ旅の身の　暮れ行く秋は
かばかり悲しきものか　あななつかしき故里よ
去年の秋の夕暮に　姉妹うちつれて
金波銀波打ちよする　あの月あの虫の音を
歌ひしに今は　日うつろひて
遠き異郷にあり　暮れ行く夕に
故山のまぼろしを　思ひ出でつゝ
涙ぐむ無量の愁　……

「二」

涙の目を地にそゝげば　千草のゆらぎ
露しげく　虫はいや深き
暗愁に尙も　むせび鳴けり
あな！いとほし　汝も我と同じ思ひで
まだも鳴くのか　……
仰げば上弦の月　丘の松に
白く懸れり　あたり寂として
たゞいとほしき虫の　暗愁の聲あるのみ
あゝ蟲よ！　海山越ゑて
獨り學ぶ身を　尙も限りなく
泣かすのか　暗愁にむせび鳴く
汝よ！　……

× × × ×

初夏の一日

本科第四學年　齋藤貞子

夏蜜柑の白い花の香を、何處からともなく家の内へ送つて來る。庭の面を見渡せば、木々の青葉も日毎〳〵に濃く茂り行く、櫻の花を見て樂しんだ春の夢は、山時鳥に覺まされて何時しか初夏は來た。

私は或る日曜日に弟を連れて何心なく庭に下りた、一つ葉は淺綠の新芽を伸ばし松は綠を上げて、庭の垣をなせる茶の木の一番茶は十五六日前に摘まれたけれども、二番茶となる葉が軟かさうに出て居る。

猶飛び石傳ひに行つて見ると筍は皮をも脱ぎ捨てゝ青々とした幹を出してゐるのを眺めつゝ川邊へ出た洋々と流るゝ阿武川の彼處の岸に此處の汀に、或は乙女或は男の子が貝拾ひ又は沙魚釣り石伏引き等してゐる。川上より下り來る筏が玉江橋に急いでゐる橋の上には田舍より出た旅人が夏の仕度で萩の町へ出るらしく、茶席の側の山吹は七重八重夏知り顔にも咲き出でゝ、垣根に白く咲いてゐる、卯の花と其の美を爭うてゐる。

我が愛でゝゐた河岸の藤波は何時しかうつろい、今は花一總も名殘を留めず小さい藤豆が實つてゐるばかり。

私は手洗鉢の邊にある躑躅を一枚取つて我が書齋に歸つて押花とした。

永久に忘れ得ぬ友

本科第四學年　久保田花子

あゝ親愛なる友、井田さんと別れる悲しい日は與へられた。私は知らなかつた。今日井田さんと別れるとは、思ひがけなかつた。私ははや永久に井田さんなる人には會ふ事は出來ないかも知れない。今朝自働車にて行かれたるとの事は後で私は知つた。「久保田さんにも宜敷く」と泣く〳〵申し殘されたとの一言を、私は將來に於て忘るゝことは決してあるまい。

それは淡雪の降る靜かな日だつた。お友達が多く居られた爲、私は井田さんと二人で閲覽室の椅子に腰を下した。そして暫時はぼんやりと時のたつも氣附かで居た。常から稍々顏色の蒼い井田さんがこの時に限つて、何故か一層蒼さめて一種の淋しさを加へられて居たことを私は知つた。一分—二分—暫時無言の狀態はつゞいた。

稍々あつて井田さんは徐に半分笑めるが如き顏をして「久保田さん、あなたは實際幸福ですよ、女學生として。」

「まあ、そんな風にみゐて……」

「私なんかだめですの。」

「なぜ？あなたこそ何も皆幸福さうにみゐますよ。」

「いゝゐ〳〵、違ふのよ、私のお父さんはあゝ云ふお務でせう。だからよくあちこちとかはりますの。それで私だつて御一緒に行くでせう。その度に折角親しくなつたお友達ともお別れしなければならないでせう。私はそれが一番悲しいのよ。」

「……」

「私はもう女學校といふものを卒業するまでは、此處の萩に居りたいけれども……又何時かはるか知れあしない。」

私はすぐ直覺した。實際井田さんの語られる通り確にこの點に於ては私より不幸だらうと……私はまだ友との別れ……に對して餘り悲しかつたことはないこんな場合に出合つたことはない、然し考へてみると實際悲しい事だらう。折角馴れ合つた友と別れて新に他の學校に入りそしてそのお友達と親しくなられるまでの心配は、私の如き無經驗者が想像した以上に心苦しい事があるだらうと思つた、私はこの事を聞いてからは一層親しい友としての交りを續けて來たつもりである。私はもう今は井田さんとはお別れして居る。けれど今後は手紙なりとでも親しく語りたいと思つてゐる。面白い人、又或一方には不幸な人として同情すると共に今後の井田さんに幸多からんことを祈りつゝあるのである。

運動會の記

本科第四學年　椿マス子

曉靄破る煙火聞き　躍り立つたる幾百の
小女は今や夢中にて　晴なる今日の運動を
体操服にぞしのばせて　スクール目掛て馳せ付ぬ

「皆様お早う御座います」
空に囀づる鳥の音も
皆一様に今日のみは
日毎日毎に師の君の
實現するは此の時と
見る〳〵中に觀覽の
午前八時を報づるや
煙火合圖に幾百の
運動場に集りて
胸に刻みて君が代を
初秋の空に充ちみてり
双手を握る有様は
体操遊戯ダンスまで
曲につれられつれられて
紅白雄を競ふ様
お手玉繩飛富士登山
個人競技のそれ〳〵も
殊に本科四年生
二人三脚樵夫まで
時刻々と過ぎ行きて
交す言葉も喜びに
庭に笑みたるコスモスも
樂しく耳目にうつらすや
諭し給へる教訓を
勇みたつたる事故に
席も立派に作らるゝ
又も轟く一發の
生徒一同いつさんに
校長先生のみさとしを
唱ふる聲は勇しく
いよ〳〵運動始められ
西洋婦人も何のその
雄々しく響く樂隊の
數ある人の眼ひき
實に云ふ虎龍の爭ひや
女に大事な割烹や
興味盡くべき時はなし
難所廻りは面白く
書けば限りもなかるべし
待ちにまちにし地方別

ハードルレースは始りぬ
應援旗をば振りかざし
勵ます様の雄々しさよ
チョーク片手に記載する
運動設備や繰り出しと
責務重しと働かる
秋の紅葉と輝きぬ
三つを一所に音律に
体操わきて美麗なり
學級別のリレーには
小さき腕高くあげ
見物人の一同も
殊に目に立つ長刀は
今も忘れぬけなげさよ
やがて閉會時は來ぬ
金剛石を打ち唱へ
澄み渡りたる秋空に
天に轟き地に轟く
樂しかりける此の一日

× × ×

白地に日の出を描きたる
聲を限りと歡味方
やがて優劣きまりなば
記錄係りも急がはし
皆それ〴〵の命を負ひ
やさしき乙女の頬は今
唖鈴ワンズ旗体操
合せ行ふ聯合の
職員競走面白く
我れを忘れし乙女子の
打ち振る旗の美しさ
なりを靜めて固唾のむ
大和おみなの精神を
夕陽空に高き時
職員生徒集りて
萬歳三唱その聲は
夕べを拂ふ風の音と
あゝ諸共に打ち集ひ
嬉しかりける運動會

玉木病院參觀の記

補習科　塩見愛江

五月晴の一日炎々と直射する正午の光線を浴び乍ら私共補習科生一同は家事科實地見學の爲堀江先生に引率されて、新堀なる玉木病院へと向つた照り果された地上には一點の濕りもなく、木の葉すら動かぬそよ風にも輕い埃が舞ふて、まぶしく眸を逆るかゝる春の小路をふむことも、僅か數十分目的の病院へ着いた。一行いさゝか門内にて待ちやがて森田看護婦長に案内されて、藥局を右手に望み徐々に各病室を巡覽するのであつた。最初先づ第十四號と記された病室の襖はいと靜かに開放された。今まで純な白布にしづかな、白晝の夢を見て居た此の室の人々はつと驚いたに相違ない、而も十有八九人の健康者より同時に同處に奇異な目を同様に向けられた時は、彼等病者は心中如何に感じたであらう、きつと己と云ふ生に對して無情の恨を訴へたであらう!。と思つた、瞬間に兩つの瞳には熱い同情の涙が浮ぶ、かくて森田氏より、この病室について詳細な說明を與へられた。此の室の幾疊あるか知らねども、流る藥の香と哀愁の氣分とは慥に大きなものであつた。きちんと整頓されて居て、綺麗ではあるものゝこゝに施した何等の飾も美もない。ふつくりしたホワイトベットに仰臥してる病人の苦痛の樣が、そゞろに思ひやられて何人と雖も誰か此處に隔んで同情の一念禁じ得ぬものがあらう?。哀れ病者!彼等は、今如何に生なる一語を渴望し又願つてゐる事であらう!!!恐らくは乞ふ生より他には一言もあるまい、噫貴き哉生!!!ベットより、一同に弱い眸を向けし病者はいかに私共の潑溂たる元氣に憧憬したしことであらう終日をこゝに送る哀れな病み人は、只已が病魔の一日も早く全快せんことを神に祈るより外に何等の希望も快樂もあるまい、げに哀れむべき弱者よ。思ふてこゝに至れば「唯一の幸福は健康に在り」と全身に漲る血潮をもつて叫びたい。踏む足音も出來る限り、しづかに階上に行く。このあたりは皆悉快方に向つたものと見ゐて、さすがは喜色滿面に溢れ付添ふ看護人も愛敬よく、一行を迎へてくれた。閑靜なこの階上より見渡せば春の日は、うら〳〵と中天に

輝き寂寞の病舎にも訪れて居る。時こそ春なれ病見る人々に何の春の樂しみかあらん。斷腸の思ひに袂絞る者果してそれ幾人!!!かゞやかしい太陽も野にみだるゝ百花も、これらの人々に何か益せん、そは却つて悲哀の涙催すものであらふ。

病院はげに寂しかり春の日の花咲く野邊を他所目にはみて

狹い三尺の廊下にも、きれいに雜巾が掛けてあり片隅と雖も一塵もない、しづかに階段を下り目を轉ずれば、數多なる看護婦の一樣に純白なる服を着け煮沸したガーゼの整理して居るのも、いとさびしくさすがに、病院ならでは見能はざる光景であつた。進んで大手術室に案内さる下はセメントで堅く塗られ中央に控へて居る臺が、即ち被手術者をして坐さしめるところ、この臺の周圍に細い金屬製の管があり手術を始める際、之に清水を充たして塵埃の立つのを防ぐとのことであつた。かくて手術を受ける病人は痲醉劑によつてしばし幻の狀態にあると云ふ。あはれこの時執刀する、醫師の心中!側に添ふ看護婦の胸の中!、併ながら手術後の經過はいづれも良好にして十日間を經たる後には、一人立つて靜かな室内の散歩にたへ得るとのことであつた。私は今更乍ら最近醫術の進歩の偉大さに驚異の目を見張り、サイエンスの恩惠を深く感謝した。なほも進んで、婦人科室に到り手術に依つて出されたる、子宮内の諸寶物について說明をきく。一見するだにぞつとするその言ひ知れぬ心地惡さ、げにげにお互私共は皆かくの如しとは知りつゝもなほ、一種な不快の念を禁じ得ない。間もなく婦人科の和田醫師のお歸あり再び詳しき說明をきく。室に裝置してある電氣療法を指され、これが諸種の病氣を癒すに卓効ありと說かれ、實驗のため何人にても進んで掛られよ。とのことにつき先づ第一番に私が共鳴し之が實驗者となつた。最初より掛りはしたものゝなほいさゝか、恐怖を抱き居たると多少の身體衰弱とにより、見る内全く冥途の旅路に上つたのではないかと思はれるまで精神は消ゑ去らんとした。こは輕い腦貧血のためでしばし休まんとて、寢臺に伏した。噫!これもやがては學生時代の思ひ出として、永久に私の頭に存することであらう。今までの元氣もいづくにか奪はれ

何となう全身がだるい、その苦しみの内に醫師より難產について、篤とお話があつたが朦朧として明かな記憶を止め得なかつた事を殘念に思ふ、後に繃帶の取り替もあつたが意氣消沈して、微かな視線を之に注いだのみ。かゝる内一わたり參觀も終れば一同深く感謝の意を表して去り、なつかしい阿武川のほとりに向つた。

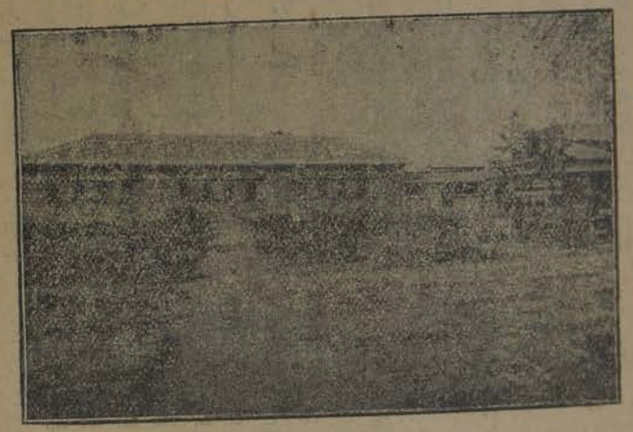
（大正九年五月十七日認む）

修學旅行の記

補習科　岸　綠

目醒時計は鳴つた。正しく午前三時、（大正九年十月十四日）である。たゞ歡喜と希望とに滿ち張り切つた心で急いで雨戸を繰り明けると眞の闇、昨夜の嵐は跡方もなく消ゑて、うよとの風の音もしないが、空はどんより曇つて今にも、泣き出し度いやうな空模樣である。しかし少々天候はわるくとも押して行くとの昨日の先生のお話しがあつたので無論行く事に定めて、其のまゝ顏を引込めると手早く仕度を始めた。髮も解け無い樣に丈夫に結つた。其の内に膳の用意も出來たので、母上の注意で强ひてもう一碗を戴いて、昨夜揃へて置いた品を今一度改めてお辨當を一つ加へた。これですつかり用意は整つた。唯中々待つ間は長い。四時二十分……二十五分……三十分遂に堪らなくなつて外に出て見ると、遙彼方に提燈の火が見ゑて石川さんの高い話し聲が洩れて來る。ほつと安心の息をつき家に引き返し、荷物と傘とを持つて聲の掛けられるのを今か〳〵とまつてゐると、だん〴〵話聲が近づいて、岸さん!と呼ばれると返事と共に體が門から走り出た。そして樂しく語りながら橋本にさしかゝつた頃から、ぽつり〳〵と降り出した。あゝ何といふ憎らしい雨であらふ。折角の今日の日に降らなくてもよからうものを。遂に傘を擴げなければならぬ樣になつた。八丁筋に所々提燈の火の見ゑるのも皆我等の同行であらう。學校の門をくぐると、控所の入口に立つて居られる多くの人々をかすかに提燈の光で見た。それは附き添つて來られた父兄の方々、皆空の模樣を氣遣つて居られるらしい。雨は以前に倍して强く降つて來た。

暗黑の長い廊下の宿直室の前には、高女の印の入つた提燈がともされて、其の下を通る時のみ誰と分るのが、通つた後は薄墨の樣に消えて、彼處此處にぼんやり固まつて見えるのは私共の仲間であらう。行かれるだらうとは期待してゐるものゝ、この降り樣を見ては頗る心細い。其の内來る人も追々多くなつて話聲も雨の音に消されてはつきりとは分らぬが大分騷々しくなつてきた。と雨もだん〳〵小止みになつて早や夜明けの薄明りに外の景色も見分けられる樣になると、廊下に整列して人員點呼をするとの事に、さあいよ〳〵行かれると其の時の喜びと言つたら實にたとへやうがなかつた。何さん、ハイと此の大事な時に呼び殘されては大變さつきから待つて居ます、と言はぬばかりに返事がよい。いくら呼ばれても返事が無いと皆が言ひ合せた樣に不安な顏付きになつて、平生とは違ふこの集合に遲參すると言ふ態度に對する叱責の念の湧いて來るのを禁じ得ないのである。そして幾度か點呼される内に先生の御口を煩はすことも少くなつて、いよ〳〵出發すべく玄關前に整列した時は雨はもうすつかり上つて、東天遙に紅の雲が見え初め



新校舍

新校舍ハ平屋造リニシテ在來ノ舍監室ノ西方ニ在リ。
總坪數八十七坪半、大正九年八月十日起工シ、大正十年三月十五日竣工ス。
工費九千五拾圓ヲ要シタリ。

るなど彌が上にも心をそゝる、校長先生より色々と御訓辭を下さつたのを心に刻みて、補習科を先頭にいり〳〵と校門を出發した。今迄一泊の修學旅行をした事も無い身には、かうして皆に送られてこの先に横はる如何なる難關も苦痛にも堪へ得て三日間の旅行を終へて歸ると言ふ事は、實に大旅行である。椿村を通行する時知つた人々が奇異な目を見張つてゐた。道は少々惡いけれども晴れて何より喜ばしい萩の朝にも三日間のお別れをして振り返る淚松のあたり、少しは足も痛くなつた樣だ。トンネルを出るとの茶屋で一寸休む。そうする内に折角晴れたお天氣が又どうやら變つて、立ち込めた木々の間からさゝやかな雨が降りかゝつて來た、此處迄きた上はもう何が降らうが押し切つて進まなければならぬ。一升谷を登り始めた頃は最も激しく、まだ〳〵險しいこの先の程も思ひ遣られて何だか悲しくなる。詩趣豊かな人ならば一足毎に展開せられて行く此の雨中の山水の絶景に、如何なる歎賞の言葉も惜しまないであらうが、我々にはもうあたりの景色も目に入らぬ。たゞ一歩も早く此の阪が越えたいばかり、足元を見詰めて默々として歩いた。漸くの思ひで坂を越すと櫻の茶屋でお辨當を開いた。出發後未だ時間はたいして立たないのに、お腹の空つた事夥しい。この處からは自働車も通る位であるから一升谷に比べると至極平坦な道である。行く先々を豫想して樂しく語らひながら佐々並べと向つた。行つても〳〵山ばかり漸く佐々並に着いたのが正午頃であつたらう。此處で食事したので、すつかり荷が輕くなつて、疲れた元氣を恢復しつゝ宿屋を立ち出でた。新道と舊道の別れ道から横降りの雨が肌寒く降り出して、傘の柄から洩る雫と横から吹きつけられる雨に肩から裾迄濡しながら、それでも此傘を頼りにびしよ〳〵と山路を辿つて行た。蜿々蛇行する途中幾度も〳〵休みしてやつと山頂に達し得た時の喜び、それから下り坂で腰の骨の痛くなる迄揉まれて見覺えのある人家の所から山口町が見えた時の喜び、それは實に何とも言ふべき言の葉を知らない。ナポレオンがはるばる遠征の途に上り百難を冒してアルプス山を越え、遙に敵の陣地を望み得た時の歎喜の情に譬へられやうか。水車小屋の所より人數も全部揃つてきち

んと身仕度を整へ、いよ〳〵山口町に着いた。八阪神社の前で待つて居るから寄れとの父の言傳てを安野先生より承つたので、先生の御許しを受け瞥香山園に向はれたけれど既に行つた事もあるのでそこから一人別れて向ふに見ゆる八阪神社の大きな松の木を目當に夢中に急いでゐるとバッタリ横山先生に出合つた。わざ〳〵お迎へに來て下さつたのださうな二年振りになつかしい叔父の家の門をくゞつた。父も今朝自働車で來て居られて居る。祖母も出迎て無事に着いたのを喜んで下さつた。抱へ上げられる樣にせらせて座敷に通り一番に風呂に入つて一日の疲れを洗ひ流した。樂しく夕食の膳に向ふと、私の爲にと名物の舌鼓みやら果物などたくさん並べて、すゝめられる。斯く迄して私を迎へて下さるのかと實に親身の溫さを嬉しく思ひ感謝しないでは居られなかつた。六時迄には宿に歸る樣申し渡されてあるので、お話してゐる内にも團体の一員なる事が氣に掛つて、父をせきたてゝ宿へ連れて行つて貰つた。晩は宿の前で、閑院宮殿下の御來山を奉祝する各學校の提燈行列を見る。有繋山口縣廳の所在地だけあつて萩にはみられぬ處がある。十時過床に入つたが容易に寢られそうにもない。然し險路八里の徒步旅行の疲勞は、寢附かれぬ私共の瞼を何時か優しく撫で擦つて呉れた。……明くれば十五日、まだ暗い内から床の中で笑聲がして迎もゆつくり寢ては居られない。桶の中で芋の子が互ひに摺り合ひ乍ら漸く皮がむけて外へ出られた樣な混雜で、身仕度を整へた。直ぐこれから教育品展覽會場なる師範學校へと第一步を運ぶ。限りなく陳列された物の、其の一としてベストを盡さない物はなく、とても多くて委しく見て居られない。其の中でも我が校より出品した物は他校と比較して細心の注意を拂つて見た。それより龜山公園に登る。毛利公の銅像を拜し、此處より眺むれば山口町全景一眸の中に納められる。道路が井然として、大殿大路、竪小路など、名からして小京都の觀がある。四方、山で圍まれて萩よりは遙に狹い裏側の小さい道から下りて白壁の縣廳内を一覽する。一個の建築物としては縣内この右に出づるものはないさうである。豊榮、野田兩神社に參拜して兵營内に入る。この時は何故か非常に困憊して一步〳〵苦痛の足を引きづつて步く。兵營内は既に叔父に連れられて委しく參觀した事があるので、このまゝ休みたく思つたけれど、團體として離れる事は出來ない。兵舍内は整然としてこれが男子の仕事とは思へない程緻密に、清潔に片附いて居る。我々女子でさへ恥かしい。少し離れて小高い處に建つて居る將校集會所に行つて閑院の宮殿下の御臨席ましましたる御間を拜觀した。つい先程迄殿下がお出で遊ばしたるまゝの御座所のそば近く參つて、何とも言へぬ畏い感に打たれた。赤十字社の前を過ぎて高等商業學校の前に在るタンクを見る。是程の偉力ある文明の利器を見ることの出來るのは實に修學旅行のお蔭であると限りなく喜んだ。此の運動場の周圍は殆ど學校ばかり、何と言つても山口の一つの名物であらう。高等商業學校内の商品陳列館を一覽し其處の庭で晝食をとる。

汽車の時間のみは待てとはいはれないので、少々早目に停車場に向つたあの汽笛の音を聞くと色々な既往の樂しい思ひ出が湧いて來る。發車時間は迫つた。さらば、山口の地よ、永へに我が樂しき修學旅行の思ひ出となれ。間もなく小郡驛に着いた。此の驛には實に忘れられぬ思ひ出でがある。昨年大坂に行く時一人で淋しく發車をまつたが、今日は皆と一所に樂しく汽車をまつ、時と動機こそ違へ、驛は依然として我を迎へて呉れた。思ひ掛けなく同窓生の野村さんに逢つて、久濶の情を述べる間もなく發車した。心地よい汽車の響に輕い眠りを誘はれて、長府着が四時五分。わざわざ豊浦高等女學校の先生の御出迎へを受け、又宿の主婦も出迎へてくれるなどほんとに長府は人情美に富んでゐると思つた。故郷を離れて何十里、かうして異郷の地を踏み乍ら知らぬ町を通過する氣分は、何とも言へぬある好奇心的な愉快を與へて呉れる。凡そ一里も步いたと思ふ頃すぐ其の足で乃木神社に參拜する。

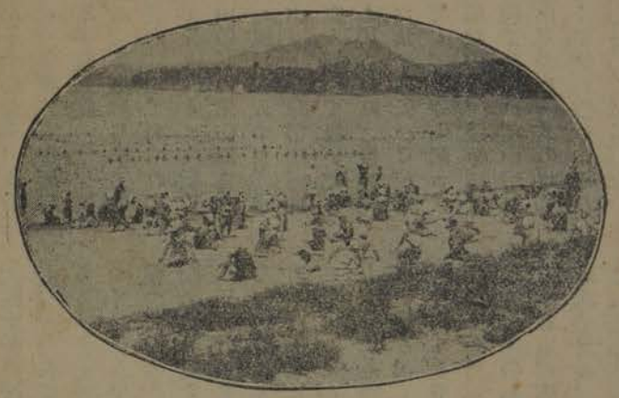
白木の總檜造りの神殿に將軍の御魂を祀るにつきづきしく、鳴瀨宮司のお話しは言々句々肺肝に達し頭べを垂れて吾長府に在るを覺ゆすたゞ將軍の神靈の前に在るのみである。特別の好意で乃木館を開館して戴き、大將の遺物、其の他の記念品を拜觀したけれど、はや夕暮れの薄闇によく見ゆす誠に遺憾で

ある。六疊の間に安置せられたる大將の御兩親二方及び大將の木像は、永久に此地に在つて無言の教訓を與へられるであらう。次いで忌宮神社に詣で、灯のつきたる長府の町を縫つて旅館小串屋に到着した座敷も二階で廣くて心地よい。夕食を濟ますと旅の疲れで其まゝぐつすり寢込んだ。翌朝午前八時出發との事、それ迄には大分間があるので知人杉山さんを訪問しようと一人宿を出た。宮の下と聞けばすぐ分つた。不意であつたので非常に珍らしがられて無理に座敷に通せられ。色々と萩の變つた模樣や、兩親の健在なる有樣を物語つた。交通の不便なる爲め萩を餘程の田舍と思はれるらしいので一生懸命、長府よりは賑かな事や劇場の三つも在る事や、明治維新の偉人の遺蹟を物語つたり、近くは新耶馬溪の稱ある長門峽の事迄、喋喋と大いに大萩を發表させてそれを置土產に御宅を辭した。豐浦高等女學校の藤井先生の東道で功山寺に詣で、それより同校を參觀した。校舍を見て心ひそかに吾が萩高等女學校を誇らざるを得なかつたのである。其處を立ち出でゝ長府の町にも名殘りを止めつゝ海邊傳ひに吾が生れ故郷なる下關の地へと足を運んだ。歷史に名高き壇の浦を左手に眺め、平家滅亡の昔を偲びつゝ前田砲臺の跡を見ていよ〳〵下關市へ入つた。私を此の世に送り出し、始めて此の世の空氣を吸つたこの下關の地で、又其の空氣を吸ふ事十有八年振り、實に感慨無量である。右手はすぐ由左は家の下はもう洋々たる青海、隨分狹隘な土地である。しかし有繁市だけに今迄とは大分氣分が違ふ。此處か神聖閑雅な長府と僅三里餘しか離れて居ないとはどうして思はれよう。萩の樣な廣い無刺激な所に呑氣な生活を送る者と、かうした生存競爭の激しい中に外來の刺激を受けて生活する人々とは、實に氣分の上に於て、知識の上に於て雲泥の差がありはしまいか。萩にも鐵道開通を痛切に感ずる。取り附きより直に赤間宮に詣づ。未だ東西も辨せぬ六歲の幼帝を、壇の浦の藻屑と消ねさせ奉りし平家一門の仕業は憎みても猶餘りあれど、榮華の夢は消ねがての雪よりもなほ淡く、敗戰の哀れを止めたこの墓に一掬の涙を灑がないでは居られやうか。噫。日清談判に名高き三階の春帆樓を仰ぎ見る。隨分廣大な家と見ねる。引接寺の境内で一休み、大分疲勞した。高い石段を下りて西の端町武藤旅館に着いたのは丁度正午少し過ぎ、長府から持參の御辨當に空腹を滿した。午後二時半迄自由外出との事、早速田中町の下野の叔父樣の宅を尋ねた。有繁下關の成金の家だけあつて廣壯な構である。取り次ぎに來意を通ずると自身に出て來られて驚きやら喜びやらが一緒になつて兎も角もと座敷に招ぜられた。御馳走が出て四方山の話の末山田さんと二人で、すゝめられるまゝにお風呂に入つた。水道の水の湯につかつたのも久しぶり。二時半に遲れては、と止められるのをしひて振り切つて急いで宿へ歸つて見ると、さあ大變誰一人居られぬ。後悔先にたゝず、時間を確守しなかつた爲とは云ひながらこんな當惑した事は無い。それでも、多分山陽ホテルであらうと云ふ事を豫知して居たので、道を聞き〳〵汗の出る程急ぐ途中、フト向ふを見れば中野先生が御一人で行かれる後姿が目に寫つた。其の時程先生をお賴り多く思つた事はなく、實に蘇生の思ひをした。丁度皆山陽ホテルの前でまつて居られた一行に加つて、團體たる特別の恩典を以て內部を見せて戴く。

大阪や神戶邊で大建築物を見た目には、左程驚きはしなかつたが、此處に到つては黃金萬能の世の中である。よし、私も何時かは此のホテルの一客とはなつて見せんず、とはこのホテルを去るに望んで心に誓つた言葉である。それよりすぐ埠頭に行つて關釜聯絡船高麗丸の船內を見る。

三等室から、一等室に到ると善美を盡してピヤノなども備はり、これが船中とは思へない程完備して居る。一巡して此處を辭すると、關門聯絡船に乘つて門司に渡る。軒を並べた果物屋が如何にもお美味しさうに果物を並べて飾り立てたのが目に着く。電車に乘るべくこの地に來たのであるが。これが萩にも往復するやうになつたらどんなに開ける事だらう名高い關門海峽も渡つた。九州の地も踏んだ、多大なる先生の御盡力によつて日頃の宿望は達せられたのである。林立した帆柱、汽車、汽船諸機關の往復藝術の進步、人智の發達など百聞一見に如かず、ここに修學旅行の眞の價値を見出すのである。我等が此の三日間の修學旅行によつて得たる新智識は、蓋

し多大なるものであらう。宿に歸つたのが七時過ぎ夕食を濟ますと連れだつて下關の町を見物して歩いた。明くれば十七日、三時半といふに起された。汽車で出發するときの心忙しさは又格別である未だ明けぬ下關の町に一歩〳〵別れをつげて停車場に着いた。汽車は一聲の汽笛を殘して黑煙を吐きつゝ刻一刻離れて行く、車窓の前のプラットホームの柱が一本〳〵右へずれて行きながら、だん〳〵町と離れて行くのが私には悲しかつた。厚狹で大嶺線に乘換へ、伊佐で又乘りかへて重安驛に着いたのは九時五十分ここから又徒歩で六七里も行かなければ仙崎に着く事は出來ないと聞いて、うんざりせざるを得ない。しかし



本校生徒水泳場ノ光景

最早修學旅行に對する希望も達せられて、萩へ歸りたい矢先であるから辛いと思ふ中にも故郷へ歸られる樂しさはあつた。幸、先生の御心配で荷物は馬車で仙崎迄運んで戴くやうになつたので、私共の爲にはどんなに助つたか分らぬ。於福の金山で晝食をし。一時間ばかりの休みにぐつすり寢込んだ、深川に出る迄の長い事、漸く此處に達したのは午後五時頃。温泉に入つて名物のお饅頭とやらをお土產にと思つて買ひに出た途中、計らずも石井の姉さんに逢つた。世界到る所に知人なからんや、である。私共の來る事を知つてわざ〳〵出て船中にて召上れとお菓子と果物を下さつた御親切の程、感謝に堪へない。深川出發の時は早や日も全く暮れて、三日月の光に道しるべを賴みつゝ正明市に達し、それより又仙崎へ向つた。旅館橋長に着いたのは午後十時頃であつた。食事を濟すと、睡眠不足と疲勞とに眠くて〳〵て何時蒲團を掛けられたか覺えず皆寢込んだ。さあ汽船入港、との事に驚いて飛び起き仕度をして外に出た。汽船會社で、はしけの出る迄暫く待つていよ〳〵乘るべく港へ出た。時正に十八日の午前一時、星影疎らなる夜の、海の彼方に青赤の火の高く明滅するは汽船であらう。あれに乘りさへすればもう一時間の後にはなつかしい萩に着く事が出來ると思つて居る内に、はしけが着いたので急いで本船に飛び乘つた。塩見さんの伯父樣の御好意で事務長の室に入る事が出來てほんとに有難かつた。ベットの上に二人が横になつて、樂しかつた修學旅行の事共話し合つてゐる内に、塩見さんはすや〳〵と寢入られた。私も寢るべく努めるけれどどうしても寢ね付かれないフト頭をあげて開いてあるドアから外を眺めると、小山のやうな大波を乘り越へ〳〵進む汽船かはつきりと感じられる。たん〳〵上下に搖れるのが激しくなつて來ると胸元が苦しくなつてきた。醉つてはならないと一生懸命船の上下するに呼吸を合すけれど苦しさは增す計り、遂に堪らなくなつてベットから滑るやうに下りて甲板に出たけれど足元が定まらない。漸くデッキにつかまつたと思ふと同時に吐瀉して仕舞つた。船に醉ふ位苦しいものはない。いよ〳〵萩の濱崎に着いたとしらして下さつたものの、唯耳に聞いて嬉しく思つたのみで迎も體を起す勇氣はない。はしけも之が最後と云ふのでふら〳〵する足を漸く物につかまつて乘り移り、濱崎に上陸した。昨夜からお迎へにきて居て下さつた先生方が、よく無事で歸つた。と脊を擦つて下さつた時は嬉し涙が溢れた。故郷の地を踏んだ嬉しさに、迎も歩けまいと思つた身も勇氣付いて、無事に旅行を終へて、曉の風に吹かれながらいそ〳〵と我が家路に急いだ。

修學旅行の記

本科第四學年　大和直子

五月三十一日火曜日曇天朝霧ほのかに消ゆく頃、朝の靜けき空氣を破りて、袴短く肩に鞄、足輕々と

足並揃へて、打ち連れ行くはそも何ぞ。これこそ我等が懷かしき父母の許離れて初旅する一團なれ。かねて氣に掛けし空模樣、夜は明けはなるれどいとむつかし氣なるも、集まりし皆の顏は、大なる希望に滿ち〳〵て其の嬉しさ滿面に溢るゝばかりなり。出發の折中野先生より、よく見學して無事に歸る樣に其の他數々御訓ありけるを感謝しつゝ歩を運ばす。恥かしきことながら椿西小學校より先へ、一歩も踏み出したることなき身なれば、友に敎はりつゝ先づ涙松目ざして行きしに、かねて聞きたる石碑見出しぬ。石碑には「涙松の遺址」とありて、左の側に「歸らじと思ひ定めし旅なれば、一入濡るゝ涙松かな」の松陰先生の御歌記されてありき、前より知りたる歌にてはありけるが、今更らながら心憂きことの多かりし松陰先生の御心の程も思ひ遣られていとゞ悲し。友の言ふ儘に後見かへすれば、今來たりし道の少しも見わざるのみか、萩は更にも見わずなりて、一入哀れさを增す。しばらく行く程に隧道々々の聲に驚きて彼方を見れば、果して隧道、私は初めて見たるなりき。隧道の中は道いと惡しかりしが通ることの面白さに今少し長くありたしと思ふ程なりき。明木も通過して行く内次第に坂になる。この邊より一升谷とか。始めは稍々緩やかなりしも、いよ〳〵急なる坂になりては、行きても〳〵頂になるかと思へばならず、上の方よりまだ〳〵との聲に呆るゝばかり、一足行けば三足位下る心地すと後の方にて誰かゞ云はれしも宜なりと思ひぬ。

峠越えて平坦なる道路に出で、途中櫻の茶屋にて休む。友とは次第に離れ〳〵になりぬ田には早苗青々と延びゆき山には目覺むるばかりの若緑の中より老鶯の聲頻りなり。何時か講讀にて學びし「峠の茶屋」の中にありし叙景文はかゝる所ならんと語らひつゝ間もなく佐々並の林屋なる宿につきぬ。此處にて母の愛を籠めたる弁當を食す。初旅なれば先づ此處より葉書を父母の許へ出せゝ。

午後一時頃再び宿立ちて次は一の坂へと向ふ。一升谷よりは道惡しくして隨分困難なりしかど、之を登れば山口町一目に見渡さるとの由なれば、元氣頗る旺盛になりて、頂を越して少しく下る。此處よりは山口町よく見ゆれば、側の家に休みつゝ、遠くより彼方の町眺めしに、折りから瀛笛耳に入りぬ。これは萩にて常に聞く電燈會社の瀛笛の如く思ひしに、あれが瀛車の瀛笛と敎へられし時はさすがに恥づかしかりき。

蜿蜒たる道を勢よく下りて、川邊にて身仕度を整へて行く内、荒川、森脇の兩先生が迎へて下さるに、一入力づきいよいよ山口に入りぬ。山の麓に、高く聳ひゆる五重の塔を右手に見て、瑠璃光寺の門前に出づ。外より拜して直ちに過ぎ去り、博物館に入りぬ。此處は明日見學する豫定なりしも、明日は生憎月の始めにて觀覽は許されざるとの由なれば、最早や觀覽時刻は過ぎたれど、校長先生の御心配によりて、特に今日觀覽する事を許されたるなり。

館内は第一號室より、第八號室に至るまで分れて、各々珍らしき地、歴、理科其の他の參考品を蒐集したり。

第一號室…寒流、暖流の水産物、殊に暖流の蟹の「かざみ」と云へるものは其色いと美なりき。

第二號室…陸上の動物、その棲息狀態などを示し、殊に懶樹と云ふ動物をかしと思ひぬ。足の指三本、手の指二本にして、晝間は木に居りて懶眠を貪り、夜になると出でて木の葉などを食すと云ふ。

第三號室…陶器、漆器。

第四號室…アイヌ、朝鮮の風俗を内地と比較、又海上生活の有樣を陳列せり。

第五號室…地理に關係を有するもの

この中にて最も感せしは、山口縣の模形地圖なりきこの說明書に

明和四年今より凡そ百五十年前、福原近江の家僕大津郡の人有馬喜三太、自費を投じて、踏査測量して之を製作し、之を長藩主毛利重就公に献せしに、公大にこれを嘉し、喜三太を士分に拔擢し、繪畫方役に登用せり。

と云ふことありけり。文明の今日に於ては地圖などあれば、左程にもあるまじが、百五十年前の數學などの進歩せぬ時に於て自費を投じて自ら歩み量りて作りしと云ふことはいと殊勝なることゝ思ひぬ。

第六號室…家事に關係有するものにして、改良したる臺所の道具、婦人の内職にて作りしものゝ數々の中に編物、廢物利用品の巧なる物ありき。この外家

庭の教訓を敎へたる桃太郎の模形ありて、傍に「身体を丈夫にして辛きに堪へ忍べ」などの說明ありき。

第七號室……寫眞、印刷の機械又無線電信の應用として混色板、プリズム、扇風機、電信等あり。

第八號室…古武士の面影、尼子家傳來古武具、馬の鞍、鎧甲等集めたり。

この外特別室、維新紀念室あり。

特別室…小使らしき老婆に導かれて、戸開きて内に入りしに、何となく薄暗くいと嚴なる氣、滿身をいたく刺すが如き心地せり。

室の上には、周圍に宮城の御寫眞二十枚あり。七八箇立てたる硝子箱の中に、入り口に伯爵寺内正毅夫人の御遺物往筇あり、上より順次、紫、青、赤と重なりて模樣、色の配合等いと美麗を極む。次に即位大禮威儀物捧持者の赤、白の重ねの束帶、或は奏任官束帶の黑きもの、其の他官中にてお用ひ遊ばす御裝束の數々ありけり。

又英昭皇太后、明治天皇、昭憲皇太后の日常御用ひ遊はせし陶器の御茶碗、御皿などありき。

いと粗末なるものにしてこれにて、召し上り給ひたるかと畏れ多く感じぬ。

室の眞向ふには、有栖川熾仁親王の御筆になりし「出門一笑」の額、その下には、山口縣細明地圖などありき。

維新記念室…毛利敬親元徳兩公の朝廷に誓はれしくさぐさの御文其の外維新の際功勞ありし方々の筆蹟などありて

此處に入れば自ら維新當時の氣に打たるゝが如き地せり。

其の外特別室に行く廊下の右側には、絢爛なる外國地理名勝掛圖あり。又二階に通ずる階段の左側には毛利諸公及び維新に功勞ありし長州の方々の寫眞などありき。

ひとわたり觀覽したるばかりにてよくは覺わず。殊に記念室、特別室等の寶物は、つひぞ見難きものなれば今少し心留めて見たし口惜しく思ひつゝ、門を出でて縣廳へと向ふ。ここは粧をはきたる儘にて先づ昇りて出でたるが、露臺は美しき花崗石にて作り山口市街は一眸の中に入る。我等の行きし時は時刻も遲ければ、日頃見られぬ知事室、知事官房室、事務室等も見ることを得たり。議事堂は帝國議會の議事堂と等しき組み立ての由にてスチームなどの設備いとよく備はれり。

總べて内部は皆白黑の壁にて塗り詰め、牀はリノリユームを敷きて上品なる建物なりき。西洋室は總べて天井に重きを置き四十餘萬圓も工費を要したる由なればその廣大なることも推測せらる。

更に歩を運ばして公會堂へ行く。いと廣くして一寸見ては見當のつかぬ位なりき。床の間に「所有趣」と元昭公の書かれたる額ありき。この公會堂の西洋造りならざるは昔毛利敬親公が萩より山口に移られし時、此地に政廳を建てられたるがその後之が縣廳となり改築せられしを以て元の日本風の縣廳の玄關を其儘用ひられしかば、家もこれに準へ日本造りとせられし由なり。

今日はこれより宿へとの先生のみ言葉いと嬉しく急ぎて中川旅館につく。一日中歩み通したる勞かれを湯に入りて薄らげ、夕飯濟して床に就きぬ。その頃は早や十時すぎなりしも、異郷の空に旅寢するものなれば心おちつかず、誰も〳〵寢難しと見ゐて寢返りの音などせり。私もつく〴〵と我が家のことども思へば漫に懷かしく又明日の行く先など思へば嬉しく目はいよ〳〵冴ゑしがいつのまにか夢路に入りぬ

六月一日水曜日晝午後雨、逡巡としたる雲空に蔽はれていと煮ゐきれざる氣色なり。午前六時半宿を出發して赤十字社山口支部を右手に見て香山園に登る入口の道いと細かき礫もて敷き詰め綠を上げたる松

の吹く風に美妙なる音を發する樣いと心地よかりき中に入れば日本風の建物あり。これは露山堂とて六十年前長州征伐ありしとき、長州は危急存亡に陷りしかば敬親公は如何にして救はんかとの會議を此家にて開かれしなり。集られし主なる人は木戸公なり其後明治二年品川彌次郎氏が之を保存すべく買ひ求められてより今日に傳はりしなりと云ふ。

次第に登る程に大なる銅碑あり。これは敬親公が日本の危急の際に大に盡力せられしかば明治天皇は叡感斜ならずして勅碑を建てさせられしと聞く稍小高き所に敬親、元德兩公の御墓及び夫人妙好樣の御墓あり。墓所には小さき砂を敷き詰めて塵一つだになく我等の行きし時は折しも老媼の掃除をなしつゝありたる所なりき。

次に元就公を祀りたる豐榮神社、敬親公を祀りたる野田神社に詣づ。何れも別格官幣社なり。社の前の池に架したる橋の下には、數多の龜遊びて人の行けば頭を上げて寄り來るもいと可愛らし。こゝより今八幡宮の社の側を通りて、步兵第四十二聯隊の營所の前に出づ。門内に入りて見るにいと廣く、向ふに

長き舍六つ（一つの舍には二大隊づゝある由なれば都合十二大隊あり）と、高き機關銃隊の舍一つありけり。

これより山口赤十字社病院に入る。先づ外科室の方にては電氣療養室、外科に用ゐる材料、又は痲醉器手術室、耳鼻咽喉科室などを見て、終りにエキス光線室に入りぬ。機械の構造は空氣を稀薄にしたるものゝ中へ白金線を通じ、陰陽の電流を通じて、身躰を其前にやれば前に設けし鏡に肉を通して骨のみ現はるゝ仕掛なり。我等が行きし時は丁度手の肘關節を折りたる人ありて、光線に寫されしにその樣ありゝと寫りしかどその色青白く、邊の眞暗にして心怖ろしき音のゴウ〳〵となる樣恰も奈落の底に落されたるが如く、一時も早く此處より逃れたしと思ひしに、又考ふればかゝる醫術の進めば進むほど早く病源も知れて全快の期を速やかにすと思へば又有難き樣なる感も起れり。

やゝ疲れたる足を運ばしながら次は龜山公園へ。途中山口高等商業學校、山口中學校、山口圖書館、山口縣師範學校などありき。師範の附屬の生徒思ひ〳〵の所に腰下ろして寫生せるありき。尋常三年生とか申せしにいと上手なる寫し振りなりき、私もかゝる學校にて早くより學ばゞ最も下手なりし圖畫も少しは上手になりたらんものをと思ひき、我が小學時代には寫生などと云ふ事はいと珍らしき事なりき

登りて先づ右手に眼につきしは旅順黃金山の砲臺をかたどりし砲臺なり。左の高き石段を登れば思ひがけずも廣き所ありてかねて銅像多しと聞きたるが如く毛利敬親、元德、元蕃、元純、吉川經幹諸鄕の銅像あり。こゝは眺望に富みて市街は一目に入る、躑躅美しく咲き誇れり。

此處を去りて停車場へと急ぐ、程なく汽車は來れり我目には初めてなれどさほどに感を興さざりき。汽車の窓より湯田の監獄を見る。小郡にてお辨當を取り本線に乘換てよりは醉ひたる爲めお辨當も食せず寢て居たるまゝにて、纔かに德山の海軍燃料廠と雨の降りしを覺えしのみにて其他は少しも知らず、遂に宮島驛迄過せり。

汽車を降りてよりは胸元少しく惡しければ嚴島へは如何にせんと思ひしかど、人も行かるゝものをと思ひて舟に乘り込みしに、海の靜にて舟に乘りたるが如き心地はせず。嚴島は町の美しきこと他に比ぶるものはなし。理髮館、飲食店など除きし外は皆宮島細工の賣店、さしもの數多の等しき店よくも賣るゝものかなと思ひぬ。

伊都岐島神社に詣で案内者に導かれ、其處此處と參拜したる程に案内者は常の事とは云へ、立板に水の如く流暢に說明する樣、說明の事柄より感心せり。其後海邊にて寫眞をとり、復ひき返して紅葉谷へ行く。山光水色いと明媚にして眞に天下の絕勝として逸すべからざる所、日本三景の一と呼ばるゝも宜なりと思ひぬ。嚴島より舟にて歸る頃は日も早沒せんとする頃なれば町には眩ゆき許りに火をつけて、晝間に於て見る能はざる絕好の景にて、次第に細り行く宮島は流石に名殘惜しかりき。

宮島驛より再び氣車に乘りて廣島に着す、山口とは異りて町の樣賑やかなり。今日は晝間の疲れもあり又少しは旅に馴れたれば、早くより眠たく用事濟まして直ちに床に就きぬ。

六月二日木曜日半雨半晴、ふと眼を開けばいと明る

きに驚きて飛び起く。午前五時四十八分出發と聞きしに遲くなりけりと思ひ急ぎて支度などなせしに、先生の來られて皆疲れたる故に一列車遲くせりとのお言葉いと嬉しく又安心せり。午前六時半頃廣島驛を出發してより坂と云ふ邊を通過す、山々の頂きまで麥を植ゑたり。折しも麥は黃金色に熟し其の間々に草原の綠ありて黃金色の中に綠をちりばめたるが如く一種趣きの異りたる山の景なりき。かゝる高き所へよくも肥料を施すものかなと感心せり。

呉にては先づ案内者に導かれて工廠内を此處彼處と巡覽す。廠内はいと廣くして大なる機械數多並びて其の音烈しく、側にて小聲にて語りし位何も分らず機械は總べて電氣仕掛けにて、大なる鐵板を一度に三つ四つも自由に動かすは實に文明の利器なりと驚かざるを得ざりき。かねて學びしドックの大なるには驚きぬ。今しも軍艦を此内に入れて水兵は數多上陸しつゝありき。水は大きなるポンプもて排出せられつゝありてさしもの大なる軍艦の入れる深きドックも水減じて早や底の薄々と見ゑる程になれるを見る。學校にて學びし時は斯かる想像を巡らすことは出來ざりき。げに旅行は活知識を修得するものにして「百聞は一見に如かず」の諺しみ〳〵と感じたり

共他海軍材料科を觀る。パン、ビスケットを燒く時の仕掛の大なるは思ひも初めぬ事なりき、又水兵服裁つ時電氣の力を用ひて厚き布五十枚も豆腐を切るが如き樣なり。

廣き所を巡り〳〵て再び歸途に就きぬ。恰も正午に近ければ下士卒集會所に於て晝飯を食す。水兵嬉しげに迎へらる。

この中には購買部あり。いと廉價にして宮島繪葉書など宮島にては廿四五錢もとるを十四錢、サイター等市中にては廿五六錢する由なるが、此處にては高くとも八錢にて出來る由なり。市中に於てはかゝる高價なるものを何の思ひなしに買ふ者、賣る者何れも氣が知れず。我等の歸るに及びて此所の取締りせらるゝ方のお話に「此舍の建ち初まりは外國にて妻を持たぬ者の上陸せし時の爲に或は娯樂の爲に倶樂部あるを見て日本にても斯かる所設けたしとのことにて、此方が三年研究の結果遂に出來上れり」と總坪二千八百坪にして其内千八百坪ほどに建てられたるなり。

而して終りに「女子は古より海軍に大に因あるが上に又第二の國民を作らんとする所の生徒諸子は大に覺悟せられん事を」とのお話なりき。

この方はいと太き方にて、腹脚部等は殊に大きく顎は三段に連なり、餘りに腹大く割合に手短かければ手を腹の前に組まんとせらるれど屆かずして組み得られぬ樣如何にも氣の毒なりき。

呉驛を發して三時頃廣島驛に着す、皆疲れたる故今日は廣島は見學せずとのことなりしも、大本營は明日觀る事は許されぬとの由なれば、大急ぎにて宿を出で先づ泉邸を訪れたり。園内はいと廣くして雅致に富み草木は綠濃るが如く躑躅の花盛りなり。次は大本營に行く、日露の戰の際長くも先帝陛下の此處を大本營と御定め給ひし所にして其室々を拜見したるに、長れ多くもいと質素なるものにして、殊に軍議室など甚だ狹くしてかゝる所にてし給ひしかと思はるゝ程なりき。萩出身平田氏の好意にて常には許されぬ天守閣へも登る事を得たり、いと高く七階ありて上より眺めし時は滿目の風光は一眸の中に入りぬ。

次に第五師團の歩兵の中隊の炊事室、又は各々の兵舍など見たりき。一兵舍の人數は二十人許りにて、左右の棚には各々一人づつの衣服、本箱など入れ棚の下には靴、靴下等を下げ殊に衣服は定木を用ひたるが如く何れも等しく疊みたる樣を見し時は、さすがに我家の書齋恥ずかしく思ひぬ。その外大砲、戰爭に出る時着る服を入れたる庫など見たり日常はいと見苦しき樣したれども戰爭に向ふ折は死出の旅立なれば死したる後の見苦しからぬ樣に、なるべく立派なるものを着、平素は虫が蝕ふ故に此服は二重の家の中に入れて樟腦詰にしたるよしなど聽き、古の武士の鎧甲太刀弓矢等に意を用ゐたれば、日本兵士としてさもありぬべきことゝ思ひぬ。歸る時將校集會所庭園にて堀池一麿と云ふ砲兵中尉の方より色々と面白きお話承りぬ。終りに軍隊は外面はかゝる如く規律正しく如何にも束縛せられたる如く見ゆれども内面は和氣滿ち〳〵て私の心も菩薩の如しと云はれしかば皆一度に大笑ひせり。

宿に歸りて夕飯濟まし二三人の友達と町を見物に出

でぬ、山口に比していと賑やかなりき。
六月三日金曜日晴天、午前六時宿を出發して初めて電車に乘る。昨日行きし第五師團の歩兵の演習を見たり、大砲をひきて走る馬などいと勇ましく、又新兵の馬に乘りて將校の人より「手綱より手を離せ」との命令におそる〳〵手をはなし、かたくなりたる風いとおかし。
次に西洋造りの物産陳列場に入りぬ。竹細工履物類宮島細工、陶器、漆器などあまたありけり、すべて他の賣店よりはいと廉價なり。
此處を去りて郵便局の電話交換室を觀る。五六十人の交換手の中には、十二三の子供も交りてよく熟練し一寸も休む暇はなく手を動かすは頗る早し。
町の賑やかなる所を歩みて再び元の練兵場の前に出で電車に乘りて宿に歸る。
午前十一時過ぎ廣島驛を出發して歸途に向ふ、瀬戸内海の波靜かに、白帆の點々として浮べる樣は、萩の海にて到底見る能はざる心地よき景なり。驛毎に淋しくなり行きて山口に着す、初めて見たる山口はさほどにもなかりしが廣島を見たる眼にてはさすがに淋しきものなりき。

夜は自由外出を許されしかど出でず、宿に殘りし人々と共に今日の出來事又は明日歸り得る嬉しさを語り外出せられし人々待ちて床に就きぬ。
六月四日土曜日晴天、晴れるか曇るか定めのつかぬ空の模樣なりしかど、今日はなつかしき父母の許へ歸る日なれば如何に空はむつかしうとも心は嬉しさに晴れ渡り早く歸途につきたしと、もどかしげに宿を出入する人も數多あり。
午前八時出發とのことなればそれまでには約一時間あり。宿の内に腰下ろして目を閉つれば、懷つかしき父母兄弟の樣など目前に浮びて、心は早故郷へと走る。
いよ〳〵歸途に就けば、自ら早くなりて再び一の坂を登る、去りし山口町はと後見返すれば、谷の底に沈みて淡く森の奥に消ゑ行く姿またなつかし。山路には流鶯の聲しきりにして、山路を辿り行く身には いと相應し。正午前佐々並に着す、こゝにて山口の旅館より携へ歸りしお辨當を食す。後れし人々を待ち合せて再び歸途につきぬ、天氣快晴になりて、日影麗らかに樹の間を照らす。三々五々打ちつれたる友々の山里過ぐる景は繪を見るが如くその趣亦格別なりき。午後五時頃明木に着す。早や萩に歸りしが如くいと嬉しくて隧道を過ぐれば、安野先生の御出迎へ下さるにうの嬉しさ云はん方なく、誰なすともなく傘さし上げ又はハンカチ振り上げて先生と叫ばれしなり。
次第に近つけば諸先生や寄宿生の方々わざ〳〵遠くまで御迎へ下され、金谷天滿宮の境内にて中野先生より「よく無事にて歸りき」との有難き御言葉賜はり又寄宿生の御心配にてお茶などすゝめて下さるにいと嬉しく有難き事のみにて、側にて此樣眺め居りし人のさすがは女學校、お茶などよく氣付きしことゝ賞めしかば一人嬉しかりき。
一同こゝにて別れ家路さしていそぎぬ。我が家の門前に歸れば祖母や弟妹等が迎へてくれ、家よりは父母の「歸つたか」の聲實に嬉しく何に喩へるものもなかりき。湯に入りて久々にて樂しき我が家の膳に向ひ、面白き旅行の話は盡きせざりき。
さて過ぎし日の事ども思へば、廣島呉等の交通機關のよく發達せる事なりき。それと同時に萩の不便なることを非常に感じぬ。例へば都會の人は他に行く時などにても時間を多く費さずして早く目的地に達することを得。されとこれに反して不便なる地に生れし我等は多く時間を費して遲く着す、故に我等は不利益のことのみ受くるなり。時間は金錢には代へられぬことなり、然れども都會になるほど人情は薄らぐ樣にて、山口の旅館は廣島よりは、物質上に於てはいと劣れども情の點に於ては甚だ優ると覺ゆきやはり人は如何に學問を有しても人情の厚き方よし私が若し都會に出でたりとしても決して薄情なる擧動はせず田舍の如き厚き情もて人に接したしと思ひぬ。

和歌

修學旅行雜詠

補習科　椿　マス子

行くところ我を迎ふる心地して
　うれしがりける旅の道かな

橘のみのる里をもてらすらん
　豊浦の空に澄める月影

心なき櫻を見ても旅すれば
　思ひ出さるゝふるさとの樣

いとゝ尙はげみつとめん長刀を
　おくれをとらず尙優るまで

我身をば千鳥になさば一息に
　飛びて行きなん四國の島に

紅白の亂れ爭ふいにしへを
　語るか今も磯の白波

色くろき田舍乙女も今こそは
　ホテルの人よと燃ゆるまなざし

村雨にふるさと思ふ袖ぬれて
　いとゝ淋しき今日の旅かな

○本科第四學年　久保田花子

小急ぎに二人の友とかへり來し
　假橋の上の風の寒さよ

顏出しゝ炬燵を圍む夕にも
　優しき祖母は今は在さず

學び舍のカーテン引けば南園の
　館に淋し時雨降るなり

學校に來りて見れば紙入れを
　急ぎしまゝに忘れてぞ來し

よく見れば机の榜の紙入れは
　獨り小さく待ちてありけり

つゝましく冬の夜長に針運ぶ
　我が指先の小さきつきかれよ

添傘の下を梗れる牡丹さへ
　小き初芽を出せしものを

暖かみ含める風にさそはれて
　硬き蕾もやゝ開きたり

ふと逢ひし子供等の眼は輝やけり
　春てふものをことごとく知る

たりがれて小暗き空の雲影も
　そと吹く風にも春は來りぬ

日當りのよき椽側に福壽草
　寒げに咲きて春は來れり

阿武の川水のよどみのいくところ
　いや眞青にぞ雲をうつせる

椽側に來りて見れば空高く
　凧のうなりのひゞきをぞ聞く

○本科第三學年　中原豊子

悲しみの去るにあらねど何となく
　針運ぶ日は心なぐさむ

○本科第三學年　井上ミツ子

友呼べど友はいまさずわびしさに
　庭にあゆめど花は散り居ぬ

○本科第三學年　三村みさを

池水にうつれる月の影見ゑて
　吾がなつかしき父母をぞ思ふ

○本科第三學年　椋木百合子

しと〳〵と降る春雨のたび毎に
　せたけをのぶる垣の朝顏

○本科第三學年　秋山京子

少女等よつとめはげめよ時の間も
　時計の針のめぐる如くに

○本科第三學年　木原花子

五月雨の菖蒲にかゝる夕まぐれ
　かすかに浮ぶ父のさむらひ

○　本科第三學年　小川　ミツ子

煙りつゝ降る春雨にとけ入りて
ほのかに香るおれんじの花

○　本科第三學年　小茅　マキ

オレンジの花咲く頃となりにけり
そゞろに思ふ我が友の上

○　本科第三學年　石川　ツル

さくさくと若葉の上を歩き行く
露もころびて心地よきかな

○　本科第三學年　村橋　元子

春雨の降る日は淋し一人ゐて
遠き都の友想ふかな

○　本科第三學年　桑原　節子

初夏の日をあびながらテニスする
少女の姿勇ましきかな

俳句

本科第四學年

弟の早起きするや雪の朝　久保田花子
柿の葉の音なく散るや秋の暮　同
初霜をのせて水仙咲きにけり　同
紙鳶あげて歸る弟の手の赤さ　同
春雨や向ふの橋を傘の行く　阿武菊子
青柳やゆらり〳〵と春の風　阿武重子
文机に桃一輪の春景色　石津可子
わらびがり山深く入る春日和　板谷敏子
春雨や霽れて鶯聲高し　宇佐川都子
おとめ等は今日も樂しき蕨狩　大田克子
大空に一人笑ふておぼろ月　小田花子
吹く風に牡丹の花は散にけり　大田キク
大空に聲ばかりなる雲雀かな　大藤アイ

古人形立てゝも嬉し雛節句　金子シズ子
ハンカチに包みてかへる初蕨　兼重龜子
苗代にかはずなくなり朧月　河村千代子
春雨や歸りを急ぐ蕨つみ　河村テル子
春雨に青みふくらむ櫻房　木村靜子
蓬摘む乙女ぞ語る雛節句　口羽龜古
春の野に道連急ぐ娘連れ　久保田チヨ
春雨に草の呼吸聞くお庭かな　久保田花子
春雨の降り注ぐ夜の靜けさよ　兒玉貞
春雨や遠く聞ゆる鐘の音　笹井ヒナ
山櫻見つかくれつおぼろ月　佐々木民子
阿武川や霞の中を筏かな　齋藤貞子
燕や打ち降る雨に鳴き渡る　齊藤愛
燕やもう一聲と仰ぎ見る　末岡良子
さかさまに心あぶなし藤の花　鈴川ヒナ子
ひばり鳴く麥田の上を春の風　鈴木フサ子
春の日や薄化粧して鼓うつ　末若ヨシ子
櫻散り芭蕉は長くのびにけり　瀧口靜江
春の野に遊ぶ子供の心よさ　永田能生
鶯に誘ひ出されて橋の上　中原春江
春の日や妹居らば野遊に　中村靜子
春雨に誘ひ出された蛙かな　中村八千代
あてもなくさ迷出ぬ春の野邊　野上ヨシ子
春雨や妹のうつし繪とり出す　連池八重子
れんげ草今は盛りに匂ふかな　服部貞子
つばくらめ霞の大路右左　平田チヱ子
文机に筆投げすてし春の空　福富朝子
故里の空仰ぐかなおぼろ月　松浦コウ
お靈の眠れる部屋の靜けさよ　松田己知子
琴の音も遠く聞ゆておぼろ月　前田ユキ子

花の宴羽織脱ぎすて上着かな　三隅　ヒサ子
春日影のどかに照す寺の屋根　椋木　ヨシ子
春雨や魚釣る人の影遠し　村上　コト
菜の花や家疎らなる里つゞき　矢島　ミサヲ
陽炎や小猫も椽にたはむるゝ　山縣　カツ
春雨や蛇の目翳して花見かな　大和　直子
山路行く乙女心ののどけさよ　吉賀　ヒナ
里道に馬子もとゞまる菜種哉　吉田　ミズ子
春雨に蛇の目さしたる乙女哉　吉村　ナス

實科第三學年

春風に誘ひ出されて橋の本　井上　千代子
潮干狩歸りは暮れておぼろ月　岩崎　ムメノ
我が池にかはず聲する朧月　岩崎　サヨコ
おぼろ月櫻ながむる少女かな　植村　親

我前でつと身をかはす燕哉　岡　千歳
入學の準備忙し親も子も　岡　イセコ
つばくらや鳴き聲高し麥の上　大谷　久代
たそがれに啼くも賑はし蛙哉　河村　綾江
おぼろ月つゝじの花の香かな　河村　スミコ
菜の花に飛では止る胡蝶かな　神田　志都子
夕暮や蛙鳴くなり田舍道　河村　操子
小女等が手に籠さげて蕨狩　國重　米子
土堀てほつと顏出すみゝず哉　桐山　ミツヱ
れんげ草つみてよろこぶ姉妹　窪田　ヨシ子
母君と父をなぐさむ春日かな　黑瀨　靜子
町はづれ柳にかゝるおぼろ月　品川　政子
畦路を麥笛吹きて歸へるかな　杉本　スヱ子
川べりのあやめ寫るや水の底　末成　利子
歌うたふ田道の上のおぼろ月　樽屋　菊子
菜の畑や眞晝靜かに花こぼる　田村　富貴子
春日和障子張り替へ疊替へ　田中　文江
海邊にて姉と二人で貝拾ひ　野村　キク
淋しさよ別れ來て摘む蓮華草　林　房子
嫁にゆく友とわかるゝ柳かな　長谷　キヨ
風吹けば吹く儘になる藤の花　林　菊香
かやつれば子供心の嬉しさよ　平田　タキコ
急ぐ共吉野の花は散りにけり　廣　トミコ
春の日や小女心のうれしさよ　平野　花子
川ぞてやゆらり〳〵と藤の花　藤田　トシコ
菜の花に胡蝶出で舞日和かな　藤田　千代子
炬燵去り今日の座敷の廣き哉　安田　貞子
野遊の胡蝶をかくす春がすみ　松本　秋子
梅が香に袖ゆらぐなり春の風　松永　歌子
春雨や櫻ちりしく池の面　松本　ヒナ
空高くひばり飛び舞ふ春日哉　藤原　靜子
春風や袂輕げに小女かな　堀　幹子
淋しさよ春の山寺我一人　中津井　節子
清水汲む島の女や春の風　中村　シヅコ
春の野に聲たからかに雲雀鳴く　中村　百合子
塵たちて白髮となるや春の風　村田　トメ子
春風に小烏囀る日和かな　村木　カツ子
春の日に蝶追ひ廻す子供たち　村木　勝子
うと〳〵と眠り催す春の雨　山根　チセ
春風のそよ〳〵吹くや水の面　松浦　八重
子の爲か疲も忘れ親ひばり　吉田　ミホコ
憎らしと見れば笑へり鬼あざみ　吉賀　キヨ
燕や小袖濡らして飛びまはる　吉武　フジ
春風に吹かれて通る帆掛船　渡邊　カツ
どろ水に一際目立つあやめ哉　若松　靜子

本校記事（會報部）

大正九年六月より
大正十年七月に至る

大正九年六月二十五日　皇后陛下御誕辰祝賀式を擧行す。式後生徒學藝會を催す。

七月二十日　第一學期終業式を擧行し、校長より夏季休業中の心得につきて懇々訓誨せらる。

七月二十一日より八月三十一日まで夏季休業。

九月一日　第二學期始業式を擧行す。

九月二日より十日間、毎日午時一時より四時まで菊ヶ濱にて生徒に水泳教授をなす。

九月八日　中村モヽエ先生の就任式を行ふ。

十月十日　第四回運動會を行ふ。概況は本誌文の園中生徒作文にあり。

十月十三日　午前六時軍艦龍田は檜、桂、梅、楓、桃、柳、樟、樫の八水雷驅逐艦を引率して萩港に來泊す。本校にも職員生徒一同之を參觀す。

十月十三日より、山口縣教育會は、閑院宮殿下の御來山を機として山口師範學校内に於て教育品展覽會を開催し、以て　殿下の御臺覽に供したり。本校よりも作文、習字、圖書、手藝品等を出品す。幸にして作文、習字二軸、特別室御臺覽の榮を得たり。

十月十四日　補習科、本科四年、實科三年の生徒八十四名は、中野、上田、安野、長澄の四教員に引率せられて、修學旅行のため午前六時出發、午後四時三十分山口町着諸所見學、宿泊。

十月十五日　旅行團は午前中山口見學、午後一時山口を發して長府町に至り町内見學、宿泊。

十月十六日　旅行團は早朝出發、下關市及門司市見學、下關に宿泊。

十月十七日　旅行團は下關發歸路に上り晩に大津郡仙崎町に着す。少憩後汽船に乘り、翌朝四時萩濱崎に着し、各自歸宅す。

此の行は本校に於て宿泊旅行最初の擧なるを以て特に細心の注意を拂ひしが、幸にして一人の病者もなく、元氣旺盛にして豫期以上の効果を收め得たり。精しきは文の園中の作文にあり。

十月十六日　前記旅行團以外の校外教授を行ふ。本科三年實科二年は電燈會社、裁判所、響海館、拘椽酸製造所等。本科一二年は製絲會社、二孝子の墓、越ヶ濱の簡易水道、明神池、笠山、及姥倉運河等。

十月三十日　教育勅語御下賜三十年記念式を擧行す式後生徒の講演會を開き、又記念帳を製作す、又記念のため實習館裏庭に築山を造り、池を堀る。

十月三十一日　天長節祝日拜賀式を擧行す。

十一月一日　明治神宮鎭座祭遙拜式を擧行し、齋藤校長は神宮御造營の概況及　明治天皇の御高德に就て話され、池上教諭は神宮拜觀の實況を話されたり。

十一月二日　毛利公爵南園館にて開催の懷恩會へ臨席せらる。本校には生徒の薙刀仕合を御覽に供す

十一月三日　本校開校記念式を擧行し、齋藤校長より、開校記念式の由來、本校發展の徑路、吾人の覺悟等につきて話さる。

午前九時四十分より約一時間、生徒學藝會を開催す。

菊花會を開催し、一般の縱覽を許す。父兄及保證人會を開き、懇談の後、生徒學藝會及び菊花會を參觀せしむ。

十一月六日　齋藤校長は大阪府樟蔭高等女學校にて開催の全國高等女學校長會議へ出席のため出發し同十五日歸校せらる。

十一月十四日　陸軍大臣田中義一閣下來萩に付、職員生徒一同金谷に出迎す。

十一月十六日　田中大臣閣下出發歸京につき、職員生徒一同唐樋町にて見送をなす。

十一月二十一日　松蔭神社六十年祭に付き參拜す。

十一月二十六日　宇佐川政輝氏の講演あり。「國旗の尊嚴」なる題にて熱烈なる雄辯を振ひ、大に愛國心を鼓舞せられたり。

十二月八日　皇后宮大夫大森鐘一閣下は、本縣知事中川望閣下と同道にて來校せられ、南園館に入り舊南園御殿を覽、暫時休憩の後退出せらる。

十二月十三日　北支那饑饉に付て、帝國教育會長澤柳政太郎氏より救濟義捐金を募集し來れるにより

職員生徒中より金二十五圓を贈りたり。

十二月二十四日　第二學期終業式を擧行す。

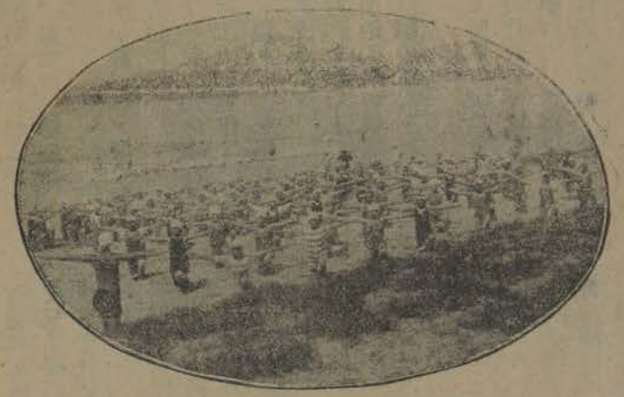
十二月二十五日より二週間冬季休業をなす。

大正十年一月一日　新年拜賀式を擧行す。

一月八日　第三學期始業式を擧行す。

一月十三日より二週間薙刀寒稽古を行ふ。教師は長澄助教諭、生徒は寄宿舍生中本科一二年を除きたる全部と通學生中補習科本科四年實科三年の有志者とし、雨天體操場に於て毎日午前七時より約一時間半、いと熱心に元氣よく行ひたり。

一月二十四日　吉田松蔭先生母堂杉瀧子刀自の淑德に關する講話會を開き、中野教諭より刀自の人格の高尚なりしこと、子女の教育に心を注がれしこと、松陰先生の如き偉人を育成せられしこと、前半生の苦心と老後の榮譽等につきて話されたり。



本校生徒水泳前の體操

二月十一日　紀元節拜賀式擧行。

二月十二日　本郡々會議員一同及郡視學、四峠内の町村長の方々三十五名、視察のため來校せらる。本校にては先づ授業を參觀せしめ、それより生徒の手に成れる晝食を差上げたり。

二月十七日　中津江教諭より祈年祭に關する講話をせられ、それより一同、春日神社の祈年祭に參拜したり。

二月十八日　中野教諭は高等官六等待遇に昇進せらる。

二月十九日　道路交通安全宣傳のため午後一時より職員生徒一同隊伍を組みて町

内を練行き、同二時歸校す。

三月三日　皇太子殿下には歐洲御見學のため御出發に付き、本校には午前九時より　皇太子殿下御外遊御平安祈念式を擧行し、式後一同春日神社に參拜して殿下の御平安を祈願す。

三月四日　本縣視學官中谷秀氏來校視察せらる。

三月十日　陸軍記念日につき、北川大佐を招聘して記念講話會を開きたり。大佐は輓近戰術の進歩、戰爭の悲慘、歐米列强の自國世界第一の思想、婦人の國家に盡すべき道等つきて精細に話されたり

三月二十日　本科第一回、實科第九回、補習科第七回卒業式を擧行す。

卒業生數並に受賞者數左の如し

本科卒業生　四八　（創立以來計四　八）

實科卒業生　四五　（創立以來計六八一）

補習科卒業生　一七　（創立以來計一六七）

受賞者

知事より表彰を受けたるもの

操行善良學力優秀　實科　野田喜代

郡長より表彰を受けたるもの

操行善良學力優等　本科　堀　フミコ

操行善良學力優等　本科　國弘淑子

校長より表彰を受けたるもの

操行善良者　本科　一　實科　一

成績優良者　補習科　三　本科　三

三ヶ年皆勤者　本科　二

一ヶ年皆勤者　本科　四

成績の進歩顯著なるもの　補習科　一　本科　一　實科　二

級長　三

副級長　六

本日中川知事閣下より賜はりし訓辭及び岡村郡長殿より賜はりし告辭左の如し。

諸子多年螢雪ノ功空シカラス茲ニ卒業ノ榮ヲ荷フ諸子及諸子父兄ノ喜察スヘク本官亦衷心之ヲ欣快トシ所懷ノ一端ヲ告ケムトス

抑國民風教ノ振興ト社會道德ノ向上ハ婦人ノ健全

ナル思想ト崇高ナル信念トニ懸ルコト甚タ多シ古來我國民ノ誇トスル武士道ノ如キモ其ノ一半ハ貞烈ナル婦人ノ力ニ依リテ發達セリトイフモ過言ニアラス

今ヤ未曾有ノ大戰亂ノ後ヲ受ケテ世界一大革新ノ機運ニ際會シ國家社會カ志操健實ニシテ教養アル婦人ニ俟ツ所頗ル大ナルモノアリ望ムヨクハ諸子深ク其ノ本分ヲ自覺シ常ニ新時代ニ適應スル良妻賢母タラムコトヲ念トシ自重自愛婦道ヲ完ウシテ本校教養ノ趣旨ニ副ハムコトヲ期セヨ

大正十年三月二十日

山口縣知事從四位勳三等　中川望

告辭

茲ニ本校本科第一回實科第九回ノ卒業式ヲ擧行セラル、ニ當リ本官親シク此ノ盛儀ニ列シテ諸子ノ榮譽ヲ祝スルハ衷心欣喜ニ堪ヘサル所ナリ

顧フニ一國ノ盛衰ハ一家ノ消長ニ基因シ一家ノ消長ハ主婦タルモノ、能ク其ノ任務ヲ完フスルト否トニ因ルハ言ヲ俟タスソノ一家ヲ齊ヘテ舅姑ニ仕ヘ夫ヲ助ケテ後顧ノ患無カラシメ子女ノ教養ニ任シテ忠良ナル國民ノ養成ヲ期スルハ大和婦人ノ天職ニシテ諸子ノ任務ヤ實ニ重且大ナリトイフヘシ

而モ時勢ノ進運ハ諸子ヲ家庭ノ人タラシムルノミニ止ラス教育ニ產業ニ其ノ他社會百般ノ施設ニ亘リテ諸子ノ活動努力ヲ要スルモノ益々多キヲ加フ諸子ハ多年ノ研學修養ヲ積ミテ世ニ立チ家ニ處スルノ素養ヲ得タリト雖モ其ノ實地ニ臨ムニ當リテハ尚不足ヲ感スルコト尠カラサルヘシ冀クハ進ンデ高等ノ學校ニ入ルト直チニ世ニ立チ實務ニ從事スルトヲ問ハス常ニ心身ノ修養ニ留意シ淑德貞誠ノ切瑳ニ努メ婦女ノ天職ヲ完フスルト共ニ又地方婦人ノ中堅トシテ力ヲ鄕閭ノ醇化ニ致シ以テ婦人ノ範タルニ恥チサランコトヲ一言以テ告辭トナス

大正十年三月二十日

山口縣阿武郡長從六位勳六等　岡村勇二

三月二十四日　修業式を擧行す。

三月二十五日より四月七日まで休業。

三月二十八日、二十九日入學試驗を行ふ。

四月八日　入學式及始業式を擧行す。

式後新入生に對して生徒心得につき訓話をなし、父兄及保證人と種々の打合せをなす。

四月二十一日　藤田直人先生の就任式を行ふ。

四月二十二日　本校創立紀念式擧行。

四月二十四日　文部省督學官關口壯吉氏來校視察せらる。

四月二十九日　中津江延彦先生、萩中學校へ轉任に付、告別式を行ふ。

五月十四日　生徒に學校往復途中、靴、雜囊の使用を許す。

五月十六日　縣社志都岐神社例察につき講話會を開き、藤田先生より元就公及忠正公の御事蹟を話さる。引れより職員生徒一同志都岐神社に參拜す。

五月二十日　男爵毛利五郎閣下御來校御講話ありき

其の要領は教の園に載せたり。

同　日　玉江浦火災義捐金五拾圓を本校職員生徒中より寄附す。

五月二十七日　海軍記念日につき海軍中佐栗屋雅三氏を招聘して記念講話會を開く。氏は日清戰爭頃より以來、大砲水雷等の發達進歩の大なること並に邦人の覺悟等につきて懇切に說きかされたり

五月二十八日より三日間齋藤校長は佐波高等女學校にて開催の縣下各高等女學校長會議に出張せらる

五月三十一日　本科四年、實科三年、補習科の生徒八十五名は、齋藤校長、長澄、藤田、荒川、森脇の五教員に引率せられて、廣島縣吳地方まで修學旅行の爲め早朝出發す。午後山口町に着し、町內を見物の後宿泊す。翌六月一日は先づ山口町を見學し、それより汽車にて宮島驛に至り嚴島神社に參拜し、廣島市に至りて宿泊す。翌二日は吳市に至り見學を終へて後、廣島に歸り市中見學。翌三日は市內見學の後歸途に上り、晚に山口町に歸りて宿泊す。翌四日午後五時一同無事歸着す。

（本誌文の園中に精しき旅行記あり）

六月三日　本科第一二三學年實科第一學年の生徒二百五十名に校外教授を行ふ。先つ拘椽酸製造所、裁判所等を見學し、それより椿村沖原なる籃種製造所を觀て後、山田村倉江濱に至り、午後五時解散す。

六月六日　文部省督學官西川順之氏來校視察せらる
六月十日　時の記念日に付校長より訓話ありたり。
六月十六日　齋藤校長は山口町に於て開催の縣下中等學校長會議へ出張し、拾八日歸校せらる。
六月二十五日　皇后陛下御誕辰祝賀式を擧行す。
六月二十六日　貴族院議員にして防長敎育會理事たる湯淺倉平氏來校視察せらる。
七月十一日より同二十日まで午後一時より菊ヶ濱に於て生徒水泳敎授をなす。拾五日より三日間小堀流の先生　都濃郡視學荒川藤龜氏を招聘して實地指導を請ひたり。
七月十二日　伊藤迪利先生の就任式を擧行す。
七月十五日　關田貢先生の就任式を擧行す。
七月十六日　萩町江向の出身者、陸軍中將河內信彥閣下來校の上講話せられたり。
（講話の要領敎の園に掲ぐ）
七月二十日　第一學期終業式を擧行す。
七月二十一日より八月三十一日まで夏季休業。
學科受持（括弧內は科外）

修身	校長先生
國語	中野先生
習字、作文、歷史、敎育	池上先生
體操、國語	關田先生
家事、手藝	堀江先生
數學、理科	荒川先生
圖畫、作文	石橋先生
裁縫	森脇先生
裁縫、手藝	上田先生
數學、農業	安野先生
體操	長澄先生
裁縫、家事	世良先生
數學、理科	伊藤先生
歷史、地理	藤田先生
作法、國語、音樂	安永先生
英語	中村先生
（茶儀、生花）	上利先生
（箏曲、但寄宿舍生に限る）	原田先生

各學級生徒數及級監（八月末現在）

補習科	一〇	森脇先生
本科第四學年	四八	安永先生
本科第三學年	五三	荒川先生
本科第二學年	五〇	世良先生
本科第一學年梅組	五〇	池上先生
本科第一學年菊組	五〇	中村先生
實科第三學年	五〇	堀江先生
實科第一學年	五〇	上田先生

本會記事

（會報部）

大正九年八月より
大正拾年八月まで

一、第七回同窓會

大正九年八月二十八日第七回同窓會を開催したり。左に或一會員のものしたる記事を掲げん。

待ちに待つた同窓會は例年の通り八月二十八日午前九時より開くことになつた。久し振りにくゃる校門、昔にかはらぬ友達の元氣よさ、一から十まで懐しいやら嬉しいやらで胸一ぱいになつた。響き渡る鐘の音と共に一同會場なる理科室に吸ひ込まれた。國歌合唱會務報告など濟んで後に久原文子刀自を始め舊帥並びに會員中物故せられた方々の御靈位に參拜をした。線香の煙はしづかに、しづかに、しかも淋しげに立ち上つて居る。同じ學び舍に睦み合つた友垣の今は黃泉の客となられたかと思ふと、胸のつぶれるのを覺えた。次に庶務部より會務の報告及び會の協議事項について相談があつた。其の結果左の諸件を議決した。

一、本會を十月十七日に開くこと。但し事故ある時は隨時變更することを得。
一、本會の基金を作り以て活動の資とすること。但寄附額は一人五拾錢以上とすること。
一、明年は講習會（料理）を開催すること。
一、役員の改選。

次に校長先生の御訓話があつた。戰後の女子は大に覺醒しなければならぬ。先つ第一に體格である大に體力增進をはかり以て大に國家のために、はたらくやうに。又今日の女子は意志が弱い。今少し意志を强くして役に立つ女となるやうに。女子

は意志の弱きためか依頼心が強くて責任觀念が乏しい。如何なる困難があらうとも、どこまでも自分の最善を盡して屈しないやうな強い女子とならねばならぬ。智識の修養に就いても今少し心掛けて日進の大勢に遲れぬやうにせなければならぬ抔其外數々ねんごろな御訓へに、一同多大の感に打たれた。代つて世良先生が東京土産として、狐帶及婦人猿股を御紹介あそばした。何れも簡易にして重寶なものだと思つた。

時は丁度午刻であつたから、各自思ひ思ひの場所に陣取つて樂しい晝食を終へた。元祿袖に短い袴ありし昔のなつかしい思ひ出ども語り合ふ内に、鐘の音は「急いで來い」と告げ渡つた。程もなく初まる、餘興は以前の會場で行はれた。午後は大分涼しくなつた上に蓄音器も一入の興を添へた。時は吾が心を酌み取るでもなく容赦なく過ぎて五時を知らせた。長からぬ日をかこちながら、心をあとに殘して今日の樂しいまどゐの幕をおろした互にまたの日のつどひを約して名殘惜くも後見返りがちに歸途についた。眞紅の太陽は西山にかゝつて私達を見送つてくれた。げに盛大なりし同窓會よ。

二、卒業生送別會

大正十年三月二十日　卒業生の謝恩會及び送別會を催したり。先づ在校生總代の送別の辭につゞいて卒業生總代の感謝の辭あり。それより教員及び在校生各學級より拾五種の餘興ありて愉快の裡に閉會を告げたり。

三、玉江浦火災義捐金醵出

五月三十日　本會々員山本幸、津田エン、高木梅代師井アイの四氏發起人となり、五月十七日の玉江浦大火災罹災者なる本會員山下カメ、吉山アキコ、小野村チヨの三氏に對する義捐金を募集し本會員中百十五名より醵出せる金六拾參圓參拾錢を寄附したり

四、有志者同期會

八月三十日　第七回卒業生田中トシコ、中村ヤエコ羽村花子、羽仁とみこ、林貞子、三隅田クマの諸子は講習會出席のために會合せるを機とし、午後一時より本校作法室に於て同期會を開催し、本校教員を招きて懷舊及教育上の談話をなしたり。

五、同窓金基金募集

第七回同窓會の決議に基き大正九年八月、左の基金募集趣意書及び募集規則を作りて會員に配布したりしが、今日までに寄附せられたる金員及び氏名次の如し、尚續々寄附を望む。

同窓會基金募集趣意書

同窓相親しみ、相睦むは自然の人情である。一樹の蔭に宿り、一河の流を汲むさへ他生の縁といふに、數年窓を同じうした者が、舊を懷ひ、新を語りて喜ぶは萬人共通で、而も人生に於ける暖味である。たとひ身は異境にあつても、一片の音信を得た時、誰しもいひ得ぬ靈感にうたれるであらう我校同窓會は、總會の開催せられること既に七回會員亦既に六百有餘。校運と共に此會も年々隆昌となつてゆきつゝあるは、眞に慶賀に堪へない所である。今や此會は會員相互の舊情を溫める機關たらしめると同時に、心身の修養を圖るべき所まで生立つて來た。多少なりとも社會の爲に貢獻する機關たらしめようといふ積極的な計畫を立てるべき域まで進んできた。のみならず日新の世は吾等の油斷をゆるさぬ。少しでも怠つて居ると時勢に遲れることを免れない。是を以て總會當日又は夏季休業の際などに、本會主催の講習會の開催、若しくは有益な圖書を巡廻せしめて會員相互の堅實なる修養を圖り、日新の知見を廣めると共に、一般の婦人もなるべく之に加はることを得しめたならば、此會も益有意義なものとなるべきである加之老いたる人を慰めることや、世のあはれなものを助けることは、婦人のなすべき行の中で、最も尊くて奥床しいことであれば、此會の事業として甚だ適當なことである。年々一回催す總會も會費の爲に出席に影響するやうなことがあつては誠に殘念である。

以上述べたことに對する經費の外、會員の近況調査や、通信などにも多少の經費を要する。將來同窓會をして益々發展せしめるには、相當の經費を支出することはやみがたい事情である。此會の進

展と時勢とは我等の奮起を促してやまぬ。今の時は躊躇逡巡して居るべき時でない。これが本會に基金を蓄積して其活動を大ならしめやうとする唯一の動機である。近時會員中既に此議を提起するものあり、依つて本年八月の總會に於て、之を會員に圖りしに、滿場一致を以て可決せられる所となつた。乃ち當日出席せられぬ同窓會員諸姉や、江湖の諸彦の同情に訴へて、其賛同を乞ふ所以である。

大正九年八月

山口縣萩高等女學校同窓會

同窓會基金募集規則

一、基金ハ其利子ヲ以テ同窓會ノ事業ヲ助ケ其發展ヲ圖ルモノトス

二、基金ハ同窓會員並ニ一般篤志者ノ寄附ニ俟ツモノトス

三、基金ノ寄附ハ五拾錢以上トス
但幾回ニ分納スルモ妨ケナシ

四、基金ノ寄附ハ直接萩高等女學校ニ申込ムカ又ハ各區支部幹事ニ申込ムモノトス
但遠隔地ニ在ル人ハ山口縣萩高等女學校（振替貯金口座番號福岡一一八一四）ニ拂込ムヲ便トス此場合ニ於テハ裏面通信欄ニ同窓會基金寄附ノ旨記載ヲ要ス

五、基金寄附者ノ氏名並ニ金額ハ南園會報ニ掲載スル外同窓會基金寄附臺帳ニ登錄シ永ク其芳名ヲ留ムルモノトス

六、基金ノ利子ハ同窓會ニ使用スル外毎年利子ノ十分ノ一ヲ元金ニ繰入レ其增殖ヲ圖ルモノトス

七、基金ノ保管ハ同窓會長之ニ當リ之ニ關スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

金拾圓　岡田八重子
金五圓參拾錢　中村スミ
金五圓宛　淺野みさを　米澤秀子
安藤チヱコ　津田エン　細居しほ
山本幸　田原千代子
金四圓　某卒業生

金參圓宛　馬庭タマヨ　須子美登里
小野フミコ　桑原村治氏　小笠原嘉子
佐伯菊野　町原シカ　森田ミチ子
金參拾圓　萩高等女學校職員一同
金貳圓七拾錢　高木梅代
金貳圓五拾錢　土田ユリ
金貳圓　白根光子　赤司尊子
松井チヨ　林文　天野みつ
藤原ふじの　能美ヨシ　小野君子
金壹圓五拾錢宛　大谷文子　小田チヨ
福間サト子　片山きく　佐々木フジコ
金壹圓宛　江口辰二氏　岡朝子
岡本ミチ　下間静子　師井アイ
大谷静子　竹内恒子　山中照子
河野ユキコ　大津照子　後藤テウ
久保田ミサコ　黒瀨ヒテ　今田ナヲコ
木村サダ　倉田喜久代　山中繁
澄川孝子　高洲ナヲ子　柴田タケ代
山内ハツエ　陶村園子　伊達ユキヨ
鈴木壽子　藤川清子　有吉トミコ
波多野ナツ　八木房子　松尾チヨ
渡邊幸代　三好貞子　山根サト
大島梅尾　松本早知　松本静子
竹内淑子　光國爲子　加藤静子
小野きく　吉田よし子　音好信子
小島美智惠　原スミ　武田あや子
厚東ヨシ　尾坂喜與子　遠藤千代子
兒玉章子　岸静江　渡邊よし
山本シズ　長田千代子　金子德
金子貞　領家文子　岸緣
堀江トミコ　堀江ミドリ　小野サキ
松村糸妣　西山ヨシ　加藤静江
金子清　河崎スエ　津田よしこ
金五拾錢宛　久保アヤ子　柴田きく
松尾治子　屬智世子　內藤ツルコ
三戸タミコ　渡邊八百　神野サキ
金國テルコ　阿座上敏子　內藤ヨシコ
宮本タカ　松本ヨシコ　松井須磨子
合計金貳百〇九圓也
附記　本基金は卒業の際南園會校外會員寄附金壹圓の分とは別途のものなり

校外會員消息

玉碎を悼む

能美滿壽子

花に嵐の嫉あり、月は雲にぞ隱さるゝ、無情といふもわりなしや。藤井政子の君、あはれ二十三歳を一期として、玉と碎けて散りたまひ、一人黄泉へ旅立ち給ひし心の中ぞいかならむ。

天の成せる麗質、心ばねの優にやさしく在せし此の君を奪ひ去りにし嫉の嵐は、天魔か、夜叉か、そが猛き手に誘ひゆきしぞ口惜しき限りにこそ。げに現世に哀れ悲しき事は濱の眞砂の數あれど、死に勝るものはあらじかし。

噫、この訃音に接せし時の我が心、幾度か天に訴へてぞ泣きぬ。されど天答へず。たゞ五月雨の音するのみ。

過ぎし日、夫の君留學中を、お二人の愛兒をつれ給ひ、淋しく此處にとゞまりて、よく姑君につかへさせられき。かくて春を送り夏を迎へ、雨の朝、風の夕、只管異郷に在す夫君の上、恙なかれと祈らせ給ひし甲斐ありて、芽出度御歸朝あそばしぬ。復彼の地（室蘭）へ向はせられんとする前日、しばしの御訣れにと君を訪ひまゐらせしが、噫、これが永への御訣れにならんとは、神ならぬ身の露ほども思はざりしに、霄月美しき夏の夕、周子の君抱き給ひて、くさ〴〵の物語りをなしたまひ、互に盡きぬ名殘を惜みしに、あの晴れやかなりし面ざしの、いつの日いかで忘るべき。去年春の花をも待たで、はかなく失せし我が妹の上、いたくなげかせ給ひしに、今は其の君なし。彼地より心籠めておくりたまひし、鈴蘭の色あせたるかたはらに周子の君をお膝に抱かれし御うつし繪の、あはれ悲しきかたみの品となりしぞ口惜しき。

噫悼むべきかな、政子の君、今や已になし。在天の靈よ幸多かれ。

山内ハッエ

夏の御　さも夢の間に去り燈火暮はしくおぼゆられ

候頃と相成り候。其後誠に申譯なき御無沙汰に打すぎ今更何とも御わびの申上げ樣もこれなく何卒御許し遊ばされたく願上候。

昨日は御親切にも會報を御惠み下され、まことに有りがたく深く〳〵御禮申上候。早速會長樣の御訓辭を初め皆々樣の文の園まで、もれなく拜見致し候。同窓の皆々樣の御名簿を一々伺ひ上げ誠におなつかしく存じ上げ候。如何なる言葉にても此の私の心情を盡すことは出來がたくと存じ候。

まづ〳〵日に月に御發展の御樣子を伺ひて此上なき御めでたきことに存じ上げ候。在學の皆樣方申すまでもなく充分御勉學なさるゝ樣祈上候。

御かげ樣にて私は御校を出でてより一日だに病氣に臥し候ひしことては之れ無く至つて健やかに家事に努力致し居申候。今日まで御通知をおろかに致し居候が、私事先日當家に入籍して主婦となり申候母校にて修めし事を師の君樣の御滿足までには至らずとも一部なりとも發揮せざれば相濟まぬ境遇と相成申候。此後は充分注意に注意を加へ體育上、修養上に奮勵致す覺悟に御座候。

尚又同窓會の基金として平常私の儉約より出來候心計りを振替貯金にてお送り申上候間御受取被下度候先づは亂筆にて御禮申上候。末筆ながら會長樣初め皆々樣の御健康と會の御發展とを、かげながら祈上げ候　あら〳〵かしこ

橋口靜子

月日に關守なく正月も早や過ぎなんと致し候折柄其後打絶ねて御無沙汰致し御わびいたしやうもこれなく何卒御許し下されたく候。去る日國許の母より南園會報第八號を送來り早速開封致し候處、なつかしき母校の發展せる樣、只喜びと驚きとのみに御座候ひき、私事も去る年より東都に在りしも今日は知らせん明日は知らせん、と思ふ中に年も明けたる今日とは相成申候。只今は橋口家に嫁ぎ申候。當地は帝都のことて色々珍らしき事物もこれあり、去年の明治神宮祭の時の賑はしきことなどは、とても此地にある身にてすら再びあはるまじき心地致し候。先はペンの走り書の亂筆何卒惡しからず思召し下されたく候。末筆ながら皆々樣の御健康と校運の御隆昌

と存じ上げ候。　かしこ

岡本ミチ

一筆しめし上げまゐらせ候。梅雨中とは申しながら日々鬱陶敷御座候折柄、會長様はじめ會員御一同様には益々御機嫌おうるはしくわたらせ給ふことと遙かに推し申上候。おなつかしき南の園も其後皆々様の御盡力にて、いやましに榮え行くことゝ何より嬉しく目出度存じ上候。次に私事もお蔭様にて恙なく過ごし居候まゝ憚りながら御心安く思召し遊ばされたく候。實は先月末、宅の都合にて急に當地に參り申し候。早速御報知申上ぐべき筈に候ひしも何かと用事におはれ漸く數日前表記の處に落付き申候様の次第にて心ならずも今日まで御無沙汰に打過ぎ申候段何卒惡しからず御許しのほど一重に御願申上候。扨過る二日會長様はじめ一部の方々御旅行にて御來臭なされし際は久々にて御健かなる御顏を拜し誠におなつかしく嬉しく存じ申候。あの時は生憎と雨天なりしため折角の御見物にも嘸かし御困り遊ばせし御事とお察し申上候。かゝる地に於て御なつかしき母校の皆様に御目もじの出來得るは、これ皆母校發展の賜と何よりうれしく有がたく存居候。先づは亂筆もて失禮ながら近況御報申上度、申すもおろかに候へども時分柄何卒御身御大切に遊はさるゝ様祈上げまゐらせ候。　あら〳〵かしこ

右の外南園會報發送に對する御禮狀、御住所異動通知等會報部宛にておこされし御書簡十餘通これ有り候へども、會誌の紙數に餘裕これなく、遺憾ながら掲載することを得ず候。何卒事情御諒察の上惡しからず御了承されたく候。（會報部）

篤志者芳名

大正九年八月より
大正十年八月まで

一、本校へ篤志を以て寄贈せられし金品並に御芳名

皇國經典　壹冊　廣島縣深安郡御宅村　佐藤範雄氏

乃木大將筆詠歌復寫　壹枚　東京小石川高田老松町　柴田正光氏

伊達政宗ヨリ羅馬法王ニ贈リシ手紙及使者行列寫眞　壹枚　佐世保福石町　田坂信一氏

支那婦人用靴、金入、針差　三點　在旅順　能美ヨシ氏

元帥寺内伯爵傳　壹冊　寺内元帥銅像建設傳記編纂事業山口世話人

大江流芳錄　壹冊　山口縣立教育博物館

長門峽案内圖　壹冊　萩東田町　白石信夫氏

國譯漢文大成　文學部　拾六冊　價七拾五圓　阿武郡吉部村　内田利一氏

化石　壹個　萩町　師井次郎氏

二、南園會へ篤志を以て寄贈せられし金品並に御芳名

金參拾圓　岩國町　舊姓松浦　長田千代子氏

金參圓　田中トシコ氏　中村ヤエコ氏　中村花子氏　羽仁とみこ氏　林貞子氏　三隅田クマ氏

教育壽報其他書籍雜誌等　合計百五拾壹冊　萩町　長澄市衛氏

會員名簿

（大正十年九月）

特別名譽會員

兵庫縣武庫郡本山村（逝去）　久原文子氏
同　久原房之助氏
同　久原清子氏

名譽會員

兵庫縣武庫郡打出村　齋藤幾太氏
兵庫縣神戸市奥平野　田村市郎氏
玖珂郡岩國町　松浦誠氏
阿武郡明木村　瀧口吉良氏
玖珂郡柳井町（豐浦郡勝山村）　槇俊治氏
阿武郡萩町（大正八年十月死亡）　增山宗史氏
阿武郡萩町（吉敷郡大内村）　岡村勇二氏
大阪市東區生玉町六十一番地　岡十郎氏

特別會員

阿武郡萩町河添（大津郡三隅村）　齋藤彦一
同　河添（吉敷郡嘉川村）　中野貞介
本校教員住宅（仝郡秋穂二島村）　池上岩太郎
阿武郡萩町江向（埼玉縣秩父郡影森村）　堀田貢
同　萩町江向　荒川セイ
本校教員住宅（長崎縣北松浦郡平戸村）　柳原良助
阿武郡萩町江向（長崎縣佐世保市）　橋本
同　同　（玖珂郡玖珂村）　森脇八重子
同　同　平安古　上田チヨ
同　同　平安古（阿武郡彌富村）　安野章
同　同　江向（阿武郡三見村）　長澄市衛
同　椿村　世良
同　萩町惠美須町　河村一郎
同　萩町土原　伊藤通利
同　萩町土原　藤田直人
本校寄宿舍（吉敷郡吉敷村）　安永スエ
阿武郡萩町平安古（大津郡菱海村）　中村モヽエ
阿武郡萩町呉服町　上利政三

阿武郡萩町東田町　中村彌兵
同　同　川島　原田梅子

舊特別會員

阿武郡佐々並村（死亡）　松田ハル
厚狹郡役所　三隅要之助
（豐田）廣島市千田町五三六　植村秀枝
（松宮）東京市麹町區平河町五ノ一〇　細居シヨ
高等女學校　高田
兵庫縣赤穗實科高等女學校　高田哲
滋賀縣長濱實科高等女學校　河原夏
福岡市九州大學工科在學　前田直子
阿武郡萩町土原　坂口五郎
同　河添　山内清次
同　德佐村　中野ヨエ
（安藤）東京府西巢鴨町字池袋三二七　藤井二郎
名古屋市私立東海中學校　今井チエ子
阿武郡萩町平安古　山田兵吉
（井上）縣立高等女學校　竹内新三郎
飯塚マツヨ

（沼田）大阪府北河内郡立河北高等女學校　北川恒
（齋藤）東京府東京市大宮八條下ル西入ル　大谷タカ
山口縣宇部女子師範學校　田中タカヨ
阿武郡萩町河添　田村繁
山口縣都濃郡立都濃高等女學校　米原鶴太
（八木）埼玉縣北埼玉郡中條村字今井　本永旭
（田村）下關市武久園　井桁コサミ
（坪野）和歌山縣有田郡廣　進藤ウメ
（奈良）福井市尾上中町　三崎シヅヽ
阿武郡萩町平安古　古津瑳起子
阿武郡山田村（東京牛込區横寺町圓福寺）　河村タケヨ
兵庫縣川邊郡伊丹町玉出町　田總百合之助
山口縣立萩中學校　藤野カネ
阿武郡萩町江向（死亡）　重本マサコ
同　東田町　中津江延彦
福島城清
三輪マサ

校外會員

（編は本校補習科卒業
◎は校外會員賛金壹円（卒業の際納入の分）納入濟

第一回卒業生

（大正二年三月卒業）（年齢順）

氏名　水籍　住

◎松野ユキ　阿、萩土原
◎松本早知　全、東田町（補）阿、萩古萩
◎梅田カツ（宮木）全、南片河（補）朝鮮京城智恵町二〇木
金田トキ　大、瀬戸崎
◎大草政子（山木）阿、萩平安古（補）死亡
◎山木幸　全、全濱崎（補）
◎倉田チヨ　全、全魚店
◎竹内ミツ（竹迫）全、全東田町
◎河崎スエ（中島）厚狭郡舟木町字小野（補）
◎高垣清子　阿、萩古萩　廣島市大手町九丁目元番地
田中冬子　全、椿村（死亡）
◎伊藤ミドリ（齋藤）全、大井村（補）神戸市平野馬場町二二三
山下歌子（小澤）全、椿村　臺灣嘉義斗六製東洋製糖會社斗六製糖所
◎久保田ミサコ　北海道岡館區千代ケ岳陸軍官舎第十七號
後藤ハル（田邊）阿、萩惠美須町　朝鮮鎮南浦明峽町
◎永井ミツ（村田）全、椿郷東分村小畑（補）
◎佐々木フジコ　全、三見村（補）字田尻常高等小學校在職
◎金子ハツ　阿、大井村
◎福間サト（藤田）全、福川村
◎長谷川サダ（野上）全、萩士原（補）
◎倉田靜子　全、全四田町（補）支那福州台灣銀行金堂
◎藤井キク　全、德佐村
◎平田トシ子（平田）全、萩熊谷町　下關市山王町大崎傳太郎店
◎馬庭タマヨ（金子）全、福川村（補）萩濱崎町
◎松井チヨ（河上）全、萩橋本（補）臺灣新竹郵便局官舍
津田桃代（金子）全、椿郷東分村香川津　大阪府東成郡住吉村字新開一二七七多田
◎藤シナ（松村）全、全江向
レン（大崎）大、三隅村
桂シヅエ（國司）阿、椿村
◎有田ミサ（阿部）全、椿郷（補）萩町今古萩
◎平藤木マツ（多田）全、椿東村（補）玉造、台北龍亭庄三巴
上田トミ　全、萩河添　東京荏原郡池上四七四村方
◎石津喜與子（中村）全、全東田町　福岡縣久留米市外三井郡御井村
◎草刈フジ　全、全河添（補）
◎上田信子　全、明木村　山口町伊勢門前堀内
◎神代君子　全、萩河添
岡山縣高梁町柿ノ木町
◎玉木チヨ（大賀）全、全塩屋町
三宅勤　美、大嶺村（補）

第二回卒業生

（大正三年三月卒業）（年齢順）

◎安藤ヌサ（大岩）阿、萩新堀
◎岡藤ハル（田邊）阿、萩惠美須町
朝鮮京城四界洞六四
山口町圓政寺
阿、柴福村

第三回卒業生

（大正四年三月卒業）（年齢順）

◎阿部タケヨ（阿部）阿、彌宮村
◎加藤雪（栗屋）下關市田中新町一丁目
藤田愛子（箭島）阿、吉部村（補）大、三隅村
◎島田ウメコ（山本）全、萩濱崎
◎佐々並マツ（藤村）全、川上村
◎松岡花子（松野）全、萩士原
三浦チセ　全、全濱崎
◎櫻井由子（河北）全、全平安古
全、全今古萩（死亡）
◎河野ミツコ
◎山口屋シナ（山下）全、山田村　馬來半島孟佛州南興滝護栽培所合名會社藤田組山口屋彌一方
大森チヨ　全、萩濱崎
◎村伊藤ミツ（村上）全、全東田町
◎椿喜子　全、椿東村（補）
◎玉木ハツヨ（難波）阿、萩米屋町（補）
◎吉田チヨ（原）全、全土原（補）福岡縣嘉穂郡穂波村中島鐵業株式會社
◎大野アキ（森重）全、奈古村
全、椿村（大正九年五月死亡）
◎嶋田壽美　霜（伊藤）全、萩祝町（補）
◎木原　全、全市寺本町一四七
澄田ハツ　阿、萩堀内
吉本ヨシ（神村）全、全米屋町
阿部スマ　全、全北片河町大、深川村正明市
全、須佐村
◎岡部シゲヨ　全、萩河添（補）
◎山根英子　全、萩東田町
◎阿部真子（三好）全、全西田町
◎藤田豐子（末成）全、全平安古　姫路市五軒邸八九
◎三浦テイ（大中）熊、淺江村（補）
第三回卒業生
◎阿部タケヨ（阿部）阿、彌宮村
◎加藤雪（栗屋）下關市田中新町一丁目
藤田愛子（箭島）阿、吉部村（補）大、三隅村
◎島田ウメコ（山本）全、萩濱崎
◎佐々並マツ（藤村）全、川上村
◎松岡花子（松野）全、萩士原
三浦チセ　全、全濱崎
◎櫻井由子（河北）全、全平安古
全、全今古萩（死亡）
◎河野ミツコ
◎山口屋シナ（山下）全、山田村　馬來半島孟佛州南興滝護栽培所合名會社藤田組山口屋彌一方
大森チヨ　全、萩濱崎
◎村伊藤ミツ（村上）全、全東田町
◎椿喜子　全、椿東村（補）
福岡縣田川郡神田村字金田東繁橋
阿、椿村雜式町
全、全北片河町大、深川村正明市
全、須佐村
全、萩河添（補）
全、全西田町
姫路市五軒邸八九
全、全平安古
東京府大井町出石五一六八

長崎チエ子(三上)阿、山田村
西山ヨシ　仝、萩川島
國弘トメ　仝、仝仝
林　清子　仝、仝平安古
○藤井菊代(鎌見)仝、椿村(補)　神戸市北野町四丁目六七
○長谷トシ(吉賀)萩、熊谷町
○小宮トラ(中原)仝、萩土原
○吉賀クリ(三村)阿、萩濱崎吉賀幸助方　朝鮮釜山本町一丁目
○藤井テツ(村田)仝、仝江向
○佐藤ジヅ(金子)仝、仝平安古(補)
○内藤ヨシコ　萩町江向(
○能美滿壽子　仝、椿東村　福岡縣若松市堺町四丁目
○馬屋原孝子　仝、萩町江向
○河野千世　仝、仝土原(補)萩明倫小學校在職　萩濱崎新町
○小笠原嘉子(三好)仝、仝常盤町　新旅順(上田村)
○能美ヨシ(片山)仝、椿東村
○井上マツヨ　仝、德佐村　阿武郡下川村
○長谷芳子　仝、福川村(補)泰古平常高等小學校在職
○小河ハナエ(岩竹)仝、萩江向
○白井ハナ(平木)仝、椿村(補)　大津郡深川村
○三浦ヨシ　仝、萩町江向(大正九年六月死亡)
○金子トミ　仝、椿東村
○岩崎サダ(阿座上)仝、萩町江向
○松原ツル　仝、萩米屋町(死亡)
○久保田ヨシ(大田)仝、仝土原　下關市幡生
村木秀子　仝、仝堀内(補)　美禰郡於福小學校在職
○能美滿壽子　仝、仝(補)
○中村スミ(大山)仝、椿村　ホワイトミシン會社
○中村ツル　仝、椿村
○吉田壽美　仝、萩川島(補)
○植村フミコ(田中)仝、椿東村　大津郡日置村神田尋常小學校在職
○齋藤マス　仝、大井村
○厚東佐世　仝、椿東村(補)
○三好アヤコ(秋枝)仝、福賀村
○原フミ(長井)仝、川上村
○南方京　仝、椿東村(補)
○植村サチコ(山本)仝、仝
○三原幸子(山中)仝、萩橋本　吉敷郡小郡町
○福永フサ(伊藤)仝、川上村
○倉增千代子　仝、高俣村(補)(死亡)
○河田シヅ　玖、米川村
○齋藤キク　阿、椿村
○阿武カメ　仝、東椿村
○赤司尊子(倉田)仝、萩吉田町
○黑瀨キミコ　仝、萩江向
○山下サト　仝、椿東村

○岡野千代(長谷)阿、萩津守町
○田原千代子(石井)仝、仝東田町
○伊藤喜代(吉橋)仝、仝川島
野村フジ　仝、仝米屋町
○金子清　仝、宇田郷村(補)
○樋原マサミ　仝、萩町掘内(補)(死亡)
○堀永フクコ　仝、仝東田町
○橋口シズコ(松岡)仝、椿東村
○淺野ミサヨ(伊藤)仝、萩江向
○寺田クリ　仝、椿東村
○阿部チヨ　仝、萩町古萩
○松屋チヨ　仝、仝東田町
○[illegible]　仝、仝平安古
○山本松江　仝、仝江向(補)
○三上文子(松井)仝、仝川島(補)大坂市[illegible]
○藤原キク(三村)仝、椿東村
○小野フミコ　仝、泰古村
○藤井　政(大賀)仝、萩町江向　(大正十年六月死亡)
○小林　春(竹重)仝、仝江向　神戸市兵庫三石通リ一丁目七十七番地小林直五郎内
○黑瀨ヒサ(宮原)仝、山田村
安田ヨシ　仝、福川村(補)川上尋常高等小學校在職
熊本市外馬髮村(補)郡邊郡鎌山町
○米原ハツメ　阿、萩四田町(補)
○鈴木壽子

○吉武　靜　佐、中ノ郡村
○富塚ヌ　永(大川)阿、萩津守町
○堀永クリ(增野)仝、仝濱崎
○櫻部ヒサ(原田)仝、山田村
○吉田　豊子(山根)仝、蓋平村
○高木梅代([illegible])仝、萩濱崎
藤原久枝　仝、椿東村(補)(大正七年十一月死亡)
○山根マタコ(柳井)仝、萩平安古　山田村玉江浦(死亡)
荊木龜子　阿、須佐村
伊藤光子(北村)仝、萩江向
仝、地福村
○前田トミヨ　仝、萩唐櫃町
○美キク(美)仝、萩唐櫃町

第四回卒業生

(大正五年三月卒業)(福岡縣)
福岡縣若松市山手通七丁目百五十九番地

○佐伯菊野（旧姓）阿、椿村潮瀬　豊浦郡王司村神田
○津原ミヨコ（浮里）全、三見村　兵庫縣三原郡　岐阜縣東濃那郡中津高等女學校在職
○猪口菊枝　松帆村　大津郡俵山村湯町
○繼　富美（工藤）阿、萩南古萩
○中瞑千代　島根縣濱田（補）阿、白水尋常高等小學校在職
○永岡フサコ（佐々木）阿、生雲村
白井アキコ（吉山）阿、山田村倉江
長谷川トシコ　全、篠生村
○樋山ツル　全、萩河添
○野村マツ　全、椿東村（死亡）
○井町スミ　全、三見村　三見尋常高等小學校在職
○江山タキコ　全、椿村繼式町
○岡本秀子（田原）全、山田村　朝鮮
○柏村ヨシ（中村）全、萩川島　支那吉林省城内富寧造紙公司内
○秋山キク（齊藤）全、全御許町（大正八年八月死亡）
○澄川トラ（桂木）全、小川村
阿武ミト（河村）全、椿東村松本（補）
○藤本豊子（岩田）厚狭郡宇部市
○伊佐喜美（旧）阿、萩橋本
○原川壽子　全、全土原（補）阿、吉部尋常小學校在職
○黒瀬ヒテ（久保田）全、椿東村　福岡市赤坂七九九
○長見マサヨ　全、福賀村（補）　東京市赤坂區新坂町千葉菊一方
○下間靜子（旧）全、萩吉田町　佐賀市水ヶ江町十五
○高橋ヨシコ（旧）全、山田村玉江浦
○藤井フジノ（藤原）佐、防府町（補）吳市和庵通三丁目一〇天倉内
○井上ふみ子　阿、萩江向
○藤井文子（竹内）佐島地村（補）　東京市下谷區谷中上三崎南町七一
○長谷川壽惠（旧）阿、土原（補）
○石光茂子　全、萩下五間町
掘綾子　全、全上五間町
○吉村キク　全、椿東村中ノ倉
○内山ノブ（中村）全、萩川島　塞北久遠街二一
○笹川高子（旧）全、萩河添
全、椿村大谷　大阪市外
○齊藤ヤス子　全、椿東村越ヶ濱
○末武滿子　全、萩江向
○玉井芳子　全、全河添
○堀君代　全、平安古（補）
○山本チヨコ　全、紫福村（紫福村在大坂）
○藤山ユクセ　全、萩米屋町（補）
○難波アキ子　全、椿東村鶴江
○國司八重　全、萩橋本
○宗樂シゲ子（旧）全、萩橋本
○坂口タカコ（高橋）全、萩江向、安東郡（番）了五丁目小橋正一方
○領家マス（村上）全、全東田町　大連鞍島町三丁目山手町信濱
植村雪子　全、椿東村　時分濱尋常小學校在職　社宅九五九
全、全（死亡）　朝日町二丁目

○石川文子　全、全宗屋町
○谷井雪子（旧）全、全江向
○花村秀子　全、全堀内
○岡本ミチ　全、全吉田町（補）
○堀壽子　全、全河添
○原末　全、全平安古
○山田村（補）三見尋常高等小學校在職　福岡市赤坂七九九
○柴田タルヨ（吉岡）全、高保村　東京市赤坂區新坂町千葉菊一方
石井壽萬　全、萩土原
○白根光子　全、全濱崎
○上田ツル　全、全御許町（死亡）
○久保春枝（阿武）全、全濱崎　萩東田町
○今地マツ（旧）阿、川上村　全、萩濱崎（補）
○小笠原マス　全、全堀内
○藤村文子（野村）全、全御許町（死亡）
○松本アサ（後藤）全、全今古萩　門司市宗利町一丁目
○渡邊八百（旧）全、全江向
○山中照子（旧）全、全橋本
○河村千代　阿、萩新堀
○椿村トラ　全、全橋本
○宮原百重　全、萩橋本（補）
○三見コウ　全、三見村
○小林トキ　全、三見村
○中村キク　全、萩唐櫃
○後藤フミ　都濃野村（補）
○宮崎イチ　玖、岩国
○伊藤雪江　阿、大井村
○伊藤芳子　全、全
○伊藤ヨシ　全、椿東村
○萩原千代子（河村）全、三見村
○松尾壽　全、椿東村
○片山キク（小河）全、小川村　島根縣美濃郡吉田村
○藏貫ツル　全、生雲村（補）生雲尋常高等小學校在職
伊藤トミコ　全、椿東村
○椋木アサ　大三隅村
○清水サチ（旧）阿、萩川島

七三

○伊藤睦子　阿、大井村
厚東英子（福原）仝、椿東村剛小畑
○長井トジ　仝、川上村
○原田ハルコ（石川）天、日置村古市（補）
○師井アイ　阿、萩熊谷町
○岡田八重子（松本）仝、仝江向（補）東京市赤坂區一ツ木町八番地
○厚東ヨシ　仝、山田村奥玉江
○田村良子（近藤）仝、椿東村
○佐好子（竹内）仝、萩古萩
倉増太代　仝、高保村（補）
池田京子　仝、熊谷町（補）（死亡）
○岸森京　仝、萩江向（補）
○大崎芳江（藤本）仝、萩鍋許町
○金子喜代子　仝、萩川島
○武田アヤ子　仝、山田村奥玉江
○河村信子　仝、江向
○田上ヨシ子　仝、椿東村（補）
○中野キヨコ（田中）仝、椿村（補）
○小柳さよ子（並川）仝、萩河添
○厚吉田フミ（松重）仝、椿東村（補）
△中島ヨシコ　仝、萩土原（大正七年六月死亡）
○武林チヨコ　仝、仝平安古
○松本静子　仝、仝東田町（補）
○松尾キク（中原）阿、椿東村　神戸市兵庫区七丁目五十七
宮川ツル　仝、萩濱崎（補）
○柴田キク　仝、萩南古萩（補）小都實科高等女學校在職
○齊藤ミツ　仝、仝江向　東京市小石川區小早町六九
○藤井三枝　仝、椿町（補）（大正八年八月死亡）
田中静子　仝、山田村木間
長屋チヨノ　仝、江向（補）
○中原則子　仝、福川村
○松本喜久子　仝、椿東村
○渡邊嘉子　仝、萩古萩（補）
○久保アヤ子　仝、仝江向（補）萩明倫小學校在職
○杉村サヨ子　阿、山田村奥玉江（死亡）
○小島マツ子（結）　仝、椿東村（補）鯉ケ濱小學校在職
○土田ユリ子　島根縣益田町
松浦ウメ　阿、萩橋本
吉田貞子　仝、椿東村（補）
齊藤雪枝　仝、萩新堀（補）
蓬田庚子　仝、椿東村
○長田千代子、松浦玖、岩國散髪　大阪市西區田中町四九番地
○桂竹子　阿、萩土原
○神野サキ　仝、萩江向
○奥幾子（山根）厚、小野田（補）天連市藏後町三井社宅内

○白井チカ　厚、小野田（補）六島村大島小學校在職
○末岡ハルコ　美、於福村（補）島根縣鹿足郡日原村村上一十期内
○渡邊ヨシ　阿、椿村
○吉屋ハル　仝、萩屋町（補）
○溝部ハナコ　仝、椿郷東分村
○藤村峰子（多田）仝、仝
草刈政子　仝、萩河添
○小野サキ　仝、椿村（補）
○山内ハツエ（乃美）　椿西尋常高等小學校在職
○肝付澄江（瀧口）　東京麹町區下二番町三番地
○天野ミツ（田坂）仝、椿村　佐波郡三田尻局内元佐竹ノ塾
○森鳩美智子（黒瀬）仝、山田村　山口町堅小路
△藤田ハツセ　仝、椿村（大正九年七月死亡）
○秋山サメコ（増山）仝、萩町
新庄貞子　仝、萩土原（補）川上村立野小學校在職
○増山静子　仝、仝橋本

第六回卒業生

（大正七年三月卒業）（年齢順）

三好シゲ　阿、萩町濱崎
栗田鹿子（結）仝、吉部村
岩武綾　仝、紫福村
岩田フミエ　仝、篠生村
○山田マサ子　仝、山田村
○竹重ツチ　仝、吉部村
○小野静子　阿、奈古村
堀永ツタ　仝、三見村（大正七年四月死亡）
○中原シゲコ（富田）仝、萩土原
○藤田良子　仝、尊村
○平田志津（羽鳥）仝、椿東村
○品川マツコ　仝、福賀村
○堀清子　仝、宇田郷村
○田中静子　仝、吉村（補）
○高州美代　仝、仝
○金子德　仝、宇田郷村
○田中静（桂）仝、萩町川島
○内藤ツルコ　仝、仝江向
○今田ナチコ　仝、仝五間町
○山中松子　仝、仝平安古
○神田サトセ（服部）仝、三見村
○有吉トミコ　仝、萩西田町
○關屋千代　仝、仝瓦町（補）
森屋露子　仝、仝紫屋町
○大谷文子　仝、仝唐樋
△中村貞子　仝、椿東村（大正八年死亡）
○岡朝子　仝、萩濱崎
○福田文（林）仝、仝河添
○藤田フサコ　仝、尊村

△◎末成清子　阿、萩平安古(補)(大正九年六月死亡)
◎後藤通子　仝、椿東村
◎河野ツチ　仝、奈古村
◎小田エイ　仝、仝
◎早川照子　仝、萩堀内(補)
村上ウメ　仝、仝東田町(大正八年四月死亡)
◎堀上ヨシ子　仝、仝新堀(補)
△大庭ヨシ子　仝、仝田田町(大正八年八月死亡)
◎朝子　仝、仝米屋町
◎陶村園子　仝、仝平安古
◎松本ヨシコ　仝、仝新堀
◎綾子　熊、宗津村
◎四郷ヨシコ　仝、椿東村
◎松尾治子　仝、萩江向
◎藤田貞子　仝、福川村
◎池田トミ　仝、椿東村
◎杉山　仝、萩
◎ヒサコ(河村)仝、仝川島
◎菊江　仝、仝熊谷町
◎齊藤千代子　仝、大井村
◎松村糸巡(吉村)仝、萩上五間町
◎藤田シゲ　仝、椿村
◎秋山　操(黒瀬)仝、椿村
秋本ミツコ　阿、椿村
△◎田総イセコ　仝、萩平安古(大正八年十一月十八日死亡)
◎杉　登志惠　仝、福川村
◎岡　ツチコ　仝、仝土原
◎山内ヒサ　仝、川上村
安井フユ　仝、萩町
村上スエ　仝、仝土原
◎香川マサ　仝、仝濱崎
◎大島梅尾　仝、萩中須
◎小島芳子　仝、椿東村繞江(補)越ヶ濱尋常小學校在職
◎音吉ノブコ　仝、萩熊谷町
◎町原シカ(小河)仝、小川村
阿武郡福川村黑川
◎永梅尾　石川(仝、椿村(補))
◎幸　仝、萩江向
△◎白石藤子　仝、仝東田町(大正八年一月死亡)
◎屬　智世　仝、仝
◎　仝、仝
◎機村トミ(田村)仝、仝河添　朝鮮城津本町
◎藤川キヨコ　仝、椿東村越ヶ濱
◎末武愛子　仝、萩江向(大正八年三月死亡)
伊藤ハナ子　仝、川上村

△◎中山壽子　阿、萩(大正七年七月死亡)
原　千代子　仝、仝
◎瀬戸藤之　熊、勝間村

第七回卒業生

(大正八年三月卒業)(年齢順)

杉戸ユミ(藏重美、大田村　島根縣那賀郡石見村
◎山縣ヤス　阿、萩平安古
◎伊達ユキ子　仝、椿村
◎金子貞　仝、宇田郷村
◎遠崎シヅ　仝、萩濱崎町
平田春江　仝、小川村
山中繁　仝、萩濱崎町(補)
◎内藤ミツ　仝、川島
◎井町ヒサコ　仝、仝濱崎
◎伊藤チヨ　仝、川上村柚木谷
◎阿武フミヨ　仝、萩川島
◎池田スミ　仝、奈古村
◎後藤デウ　仝、萩濱崎
◎三島ヒナ子　仝、三見村
◎福田和子(瀧口)都、福川村
◎木村サダ　仝、萩惠美須町(補)
◎金子喜勢子　仝、椿東村
△◎松浦キミ子　仝、萩濱崎(大正八年死亡)
◎中村ヤエ子　阿、萩江向(補)明木尋常高等小學校在職
◎井映子　仝、椿村(補)　長崎縣崎戸工業所秋山内
◎松井須磨子　美、弟郷村
◎竹内マツ　阿、萩惠美須町
◎中村花子　仝、仝平安古(補)萩明倫尋常高等小學校在職
◎永田フジエ　仝、椿東村　大津郡深川村下河原
◎安田清子　仝、萩河添
◎久保ヤエ子　仝、萩上原
◎佐藤壽子(井上)仝、福川村　奉天基隆市瑞芳局區內
◎今地タミ子(三月)仝、萩江向(補)川上村
◎加藤靜江　仝、萩上原
◎鈴川綾子　吉、東岐波村　兵庫縣武庫郡住吉村御影
山田ユク子　仝、山田村
來島マサヨ(原)仝、山田村
◎安子　仝、萩川島
◎神代雪子　仝、山田村
◎落合敏子　仝、萩惠美須町
◎植村文子　仝、椿東村
◎阿武竹子　仝、仝
◎秋枝イト(阿座上)仝、福賀村
◎市原安子　仝、嘉年村
◎原スミ　仝、紫福村
大賀ヒデ　仝、萩濱屋町(補)

○三好ウラ　熊、淺江村
○横山ヨシ子　阿、川上村（補）萩濱崎
○木原ヨシ　阿、椿東村（補）藏目喜小學校在職
○杉山アサ子（久保）萩、濱崎
○宮原千代　仝、仝土原
○田中マサ　美、共和村
○林真子　阿、萩平安古（補）東京市外中野
○内田文子　仝、萩江向
○澄川千里　仝、小川村
○今地ヒデ　仝、川上村
○和田山真　島根縣安濃郡波根東村
○阿川榮子　阿、地福村
○兒玉セキ　仝、椿東村越ケ濱
厚東美嘉　仝、仝
△宮木信子　仝、福賀村
阿、福川村
△宮木信子　仝、萩平安古（大正九年八月死亡）
△溝部ウメ子　仝、椿村（補）
○田中トシ子　仝、萩吉田町
○大田春代　仝、吉部村
○伊佐トミコ　仝、萩地福村
○前田英子　仝、萩平安古（補）
○羽仁トミ子　仝、椿東村（補）
○伊藤桃代　仝、椿村（補）
○立野彌壽子　仝、田萬崎村
○大野美知子　大阪市
○倉田喜久代　阿、萩土原
○中村ハナ　仝、奈古村
○末益マス　仝、三見村
○波多野芳子　仝、萩吳服町
○山本靜子　仝、萩江向
○田坂文子　仝、仝橋本（大正九年死亡）
○中井嘉子　仝、椿村（補）
○山本清方　田元亮方
○佐田初枝　河村清子
○藤田綾子　仝、川上村
○森田ミチ子　仝、椿東村
○山下キヨ　美、大嶺村（補）萩唐櫃村田方
○烏田トメ子　阿、椿東村
○堀梅　仝、萩土原
○津田サダ子　阿、萩江向（補）
○山田村（補）
○福川村（補）
○仝
○仝

第八回卒業生（大正九年三月卒業）（いろは順）

阿、萩町濱崎（補）
○五峰ヨシ子　仝、仝
石光波子　東京本郷区駒込追分三十番地
阿、萩町川島（補）（死亡）
○林春枝　仝、仝平安古
○林靜子　阿、地福村
原敏子　高知縣高岡郡東又村
仁尾玉　阿、萩江向
○堀江トミ子　仝、仝江向（補）
○堀ナミ　仝、仝川島
○堀本トメ　仝、仝堀内
○豊田喜代子　仝、仝河添
○飯家文子　仝、字田郷村
○大津照子　仝、萩町濱崎
○大谷キク　仝、椿村國淵（補）
仝、萩町
○渡邊初子　仝、萩町
○加藤シヅコ　仝、仝米屋町
○金國テルコ　仝、仝江向
○大谷靜子　仝、萩濱崎
○齊藤ハナ子　仝、仝仝
○森松枝　仝、川上村
其他
○落合愛子　東京小石川區久堅町

△高洲ナチ子　阿、萩濱崎
○田中キサ　仝、萩町土原（大正十年六月死亡）
○田村マサコ　仝、椿東村
○竹内恒子　仝、萩町濱崎
高橋キク　仝、仝唐櫃
○田坂アヤ子　仝、山田村山田　下關市武久圖書藤内
坪倉シゲ子　熊、八代村
○根來美代子　阿、萩吉石屋町
美、秋吉村
○中原澄　阿、萩町江向　在東京
○永田シメ　仝、椿東村
村田勝子　仝、萩町江向（補）
○井町ウメ　仝、萩濱崎
○信常壽子　仝、仝平安古（補）
○野村幸　仝、仝
○小田チヨ　仝、山田村
○小澤ハツ　仝、萩町平安古
○小野君子　仝、田万崎村（補）
○小野靜子　仝、椿村
仝、篠生村
○河野ユキコ　阿、萩濱崎
○金子ヨシ子　仝、仝江向（補）
○中江三知子　仝、椿東村（補）
○横山ミチコ　仝、萩河添（補）
○高村ミネエ　仝、椿村

○國重淑子　阿、椿東村(補)
○山本イトコ　仝、椿東村
○矢島サカヘ　仝、高俣村
○山田ミツ　仝、奈古村(補)
○八木房子　仝、萩町濱崎
○松浦マツ子　仝、仝西田町
○松林和子　仝、仝橋本
松本恒子　仝、椿東村
仝、萩町
仝、奈古村
○松浦クラ　仝、椿東村
○西尾末子　仝、田万崎村
○見玉章子　仝、明木村
見玉フサ子　吉、井岡村
○後藤カツヨ　阿、萩町唐櫃
○小河ツチ　仝、小川村
○小島美智惠　仝、萩町
仝、椿東村越江(補)
○小島繁子　仝、椿東村
○遠藤千代子　吉、小郡町
阿、地福村
○寺山豊子　仝、川上村(補)
○阿武菊枝　仝、萩町(補)
○秋山佳重　仝、椿東村
阿武壽子　美、岩永村
○佐竹昌子

○佐久間エキ　阿、嘉年村
○彩山キヨ子　仝、萩町浄圓寺
○北野ツネ子　仝、仝平安古
○岸　緑　仝、椿村(補)
○木ヨシ　仝、萩町橋本
仝、椿東村
○藤部元妃　仝、萩町西田町
○三浦ヤヱ子　仝、仝濱崎
○三戸キヨ　仝、山田村
宮木マスエ　仝、萩町片河
○重岡キヨ　仝、仝(補)
白井サダ　仝、椿村
進藤秀　仝、椿東村
○道見愛江　椿東小學校在職
○平田ウメヨ　仝、紫福村
美、眞長田村
○後子　阿、萩町
○澄川孝子　仝、小川村
仝、椿東村
○須子美登里　東京女子大學在學
○山根サト(永津)　仝、大井村
仝、山田村
○鈴木ヒサ
本科第一回卒業生　(大正十年三月卒業)(五十音順)
○有吉ノブ子　阿、萩西田町
○有吉マス　仝、萩北古萩

東京本郷區元町二ノ六三明華齋科學學校
阿、嘉年村
仝、萩町浄圓寺
仝、仝平安古
仝、椿村(補)
仝、萩町橋本
仝、椿東村
生雲小學校在職
仝、萩町西田町
仝、仝濱崎
仝、山田村
仝、萩町片河
仝、仝(補)
仝、椿村
仝、椿東村
椿東小學校在職
東京女子大學在學
仝、椿村椿(補)
仝、紫福村
美、眞長田村
阿、萩町
仝、小川村
東京下谷庫練塀町主中原方
東京麹町區九段中坂上和洋裁縫女學校在學

○石川久子　阿、萩土原
仝、椿村沖原　東京神田錦町女子音樂學校在學
○板垣龍子　仝、萩東田町
仝、萩堀内(死亡)
○宇多田靜子　仝、萩濱崎町(死亡)
○大山千代子　仝、椿村沼田ケ原
○小田ユウ子　仝、椿村(補)
○小野村チヨ　仝、奈古村
仝、山田村
○大深基　仝、奈古村
○岡本ヌキ子　仝、萩春若町
○大本カヅノ　熊、佐賀村
○桂壽子　阿、椿東村
○賀盧秀子　仝、萩土原
○河村キクヨ　仝、萩土原(補)
○國重ツヤ子　仝、萩東田町
○栗田シゲヨ　仝、萩川島(補)
○倉重フミ子　仝、嘉年村
○小池キヨコ　仝、椿東村
仝、生雲村
仝、椿東村
○小嶋貞子　仝、萩東濱崎町
○小枝千代子　仝、萩川村(補)
○佐伯清子　仝、明木村
○坂本シツ子

○佐久間ユキ　阿、嘉年村
陶山ミサヨ　大、向津具村
○瀬川愛子　阿、生雲村
○谷川トラヨ　仝、山田村
○椿マス子　仝、佐々並村(補)
○坪野ノブヨ　仝、萩濱崎町
○中村サカエ　大津郡仙崎町
○中村テルヨ　仝、萩江向
○能美ツチ子　仝、萩八丁
○原ユキヨ　仝、川上村
○原田光子　仝、萩御許町
○村ミツ子　美、共和村
蓮山於莫子　阿、萩熊谷町
○堀フミ子　仝、萩川島(補)
○松浦ミサチ　仝、萩
仝、萩川島(補)
○溝部勝子　島根川郡西濱村　大津郡三隅村
○三原アサチ　阿、椿東村香川津(補)
○三好マツ　大、三隅村
○椋木里　阿、生雲村
○守永節子　仝、山田村補
○山本キク　仝、大井村(死亡)
○山根靜子　仝、椿村
○吉村キヨ

東京本郷區元町二ノ六三明華齋科學學校
大、向津具村
阿、生雲村
仝、山田村
仝、佐々並村(補)
仝、萩濱崎町
仝、萩江向
仝、萩八丁
仝、川上村
仝、萩御許町
美、共和村
阿、萩熊谷町
仝、萩川島(補)
仝、萩
仝、萩川島(補)
島根川郡西濱村　大津郡三隅村
阿、椿東村香川津(補)
大、三隅村
阿、生雲村
仝、山田村補
仝、大井村(死亡)
仝、椿村

白井サダ　阿、椿村　東京女子大學在學

實科第九回卒業生（大正十年三月卒業）（五十音順）

赤木ツナ　阿、萩椿屋町
井本捷子　全、須佐村本町中
砂　久子　全、萩堀内
上田タヅ　全、萩熊谷町（萩補）
植村マサ　全、椿東村（萩補）
上野ユキ子　全、萩平安古
江山タマコ　全、地福村
小野時代　全、奈古村
大島ヨシコ　全、萩濱崎町
河村綾子　全、萩橋本町
河崎一子　全、萩堀内
來島マツ　全、山田村
小峠ヒサコ　全、山田村木間
齊藤キミ　全、椿東村
島本ヨシコ　全、萩濱崎町
水津ヒデ　全、奈古村
宗樂ヨシコ　全、萩橋本町
田中　君　全、萩川島
田中鈴子　全、椿村
田中清子　全、萩北片河
田坂クリ　全、椿村河内
高木フミコ　全、椿東村
田口雪枝　全、椿村
田村ヨシ子　全、椿村河内
時山綾子　全、山田村
時山トシ　全、山田村中渡
刀禰フユ　全、萩東田町
富川ヨシ　全、萩熊谷町
中村ツル子　全、福川村
中村ラサ子　全、萩濱崎町
中村ヨシ　全、萩今魚店町
野田喜代　全、萩南古
波多野トミコ　全、萩西田町（大正十年九月死亡）
長谷川久子　全、萩濱崎町
弘兼靜子　全、椿東村
堀　コト　全、山田村玉江中渡　阿、椿東村
増山喜久子　全、萩米屋町
松尾スエコ　全、萩熊谷町
町田松子　全、椿村
松浦ヒサ子　全、萩東濱崎町
三上ヨシ子　全、山田村奥玉江（大正十年五月死亡）
松尾　篤　全、大井村
御手洗峰子　全、川上村立野
茂刈チエ　全、宇田郷村
大和屋靜子　全、萩濱崎町

○吉田ヨシ　阿、萩平安古

在校會員

本科第四學年（五十音順）

氏名	本籍	近況
阿武菊子	阿、萩橋本町	
阿武重子	全、福川村	本校寄宿舎（在補）
石津可子	全、萩町	
板谷敏子	全山田村	（在補）
宇佐川郁子	全、萩堀内	
小田花子	全、萩熊谷町	
大田克子	全、吉部村	本校寄宿舎（在補）
大田キク	全、椿東村	
大藤アイ	大、向津具村川尻	（在補）
金子シズ子	阿、椿東村鵜江	阿、萩江向（在補）
張重亀子	全、萩[illegible]町	川島
河村千代子	全、萩西田町	
河村ヤル子	全、明木村	
木村靜子	全、萩北古萩	本校寄宿舎
口羽亀古	全、萩佐村生雲東分	本校寄宿舎（山口県立萩女子高等学校）
久保田チヨ	全、椿東村	
久保田花子	全、全	
見玉　貞	全、田万崎村	本校寄宿舎
笹井ヒナ	全、萩町	
佐々木民子	大、三隈村	本校寄宿舎
齊藤貞子	大、三隈村	阿、萩江向（在補）
齊藤　愛	阿、田万崎村	本校寄宿舎
末岡瓦子	全、紫福村	全、椿東村
鈴川ヒナ子	全、須佐村	本校寄宿舎
鈴木フサ子	全、山田村	山口県立萩女子高等学校
末若ヨシコ	全、奈古村	（在補）本校寄宿舎
瀧口靜江	全、明木村	山口県立萩女子高等学校
永田能生	全、大井村	本校寄宿舎（在補）
中原春江	全、椿東村	阿、萩城下北堀町
中村靜子	全、全	
中村八千代	全、萩江向	
野上ヨシコ	全、椿村	（在補）
蓮池八重子	全、福賀村	本校寄宿舎
服部貞子	全、萩	
平田チエ子	全、萩江向	
福富鞆子	全、萩堀内	
松浦コウ	全、奈古村	（在補）本校寄宿舎
松田巳知子	全、椿東村	
前田ユキコ	全、萩下五間町	
三隅ヒサ子	大、三隅村	本校寄宿舎
椋木ヨシ子	阿、萩東田町	（在補）
村上コト		

矢島ミサヲ　阿、高俣村
山縣カツ　仝、六島村
大和直子　仝、福川村
吉賀ヒナ　仝、萩熊谷町
吉田シヅコ　仝、萩平安古
吉村ナス　仝、萩熊谷町

本科第三學年（五十音順）

秋山京子　阿、萩南古萩
安藤クリ　仝、椿東村
阿武米子　仝、萩川島
池上キク　吉、秋穩二島村
石井フサ　阿、椿東村
石川ツル　仝、萩濱崎町
石津存子　仝、萩河添
伊藤菊子　仝、大井村
井上ミツコ　仝、萩河添
小川ミツ子　仝、宇田郷村
小野フサ　仝、奈古村
河内山綾子　仝、萩堀内
柏木晴子　仝、萩東田町
片山壽滿子　仝、椿東村
熊田マツ子　仝、萩南片河
北野フヨコ　仝、萩平安古
木原花子　阿、萩平安古
桑原小春　阿、萩濱崎町
桑原サヨ　仝、萩椿村
桑原節子　仝、萩熊谷町
小茅マキ　仝、萩平安古
新庄信子　仝、萩熊谷町
鈴木美代子　仝、椿東村
助石アサ子　仝、萩平安古
関田テル　埼玉縣秩父郡影森村
田坂孝子　仝、萩江向
田総ユキ　仝、萩平安古
中村静子　仝、萩平安古
中村春子　仝、萩江向
中村君代　仝、萩御許町
中原豊子　仝、福川村
長嶺光子　仝、萩西田町
永安静枝　仝、椿東村
野村静子　仝、萩下五間町
羽仁素子　仝、萩江向
林アサ　仝、萩江向
福永梅子　仝、萩江向
藤田カツ　仝、萩椿村
堀トキ子　仝、萩椿村
三浦チル　仝、萩川島

三島夫久子　阿、萩椿東村
濤部キク江　仝、萩東田町
三好敏子　仝、福川村
三村ミサヲ　仝、萩御許町
三輪幾子　仝、萩御許町
椋木百合子　仝、仝櫨屋町
村木ヤス　仝、椿東村
村橋元子　仝、萩御許町
森田壽子　仝、三見村
安間アヤ子　仝、福川村
山縣アサ子　仝、萩平安古
山中トキ子　仝、萩嘉美須町
矢野ひも　熊本市九品寺町

本科第二學年（五十音順）

伊藤俊子　阿、佐々並村
伊藤壽美子　仝、萩土原
池永ハツ子　仝、山田村
岩武千壽子　仝、紫福村
井町ズミ　仝、萩濱崎町
嘉美須屋ツル　仝、山田村
桶谷ハツノ　大、三隅下村
大田貞子　仝、山田村
大田ユカ　仝、萩熊谷町
神崎清子　仝、川上村
香川トヨ　仝、萩濱崎町
金田佳子　仝、福川村
河村信子　仝、萩西田町
河村ユキコ　仝、仝御許町
國光フキ子　仝、仝橋本町
齋藤元子　仝、仝東田町
品川光子　仝、彌富村
杉山綾子　仝、萩町
須子紀子　仝、小川村
鈴賀ハルエ　厚、出合村
高洲サト子　仝、萩土原
田村ヒサヨ　仝、須佐村
刀禰琴子　仝、萩東田町
富田ハル子　仝、仝土原
長井アヤコ　仝、川上村
永田綾子　仝、萩町土原
永野文子　仝、仝橋本
中村照子　仝、仝川島
中村政子　仝、吉部村
野北トメ子　仝、萩河添
林菊枝　仝、椿村
弘ヒサ子　仝、萩津守
藤井チエ子　仝、三見村
阿、萩川島
仝、萩濱崎町
仝、福川村
萩平安古
本校寄宿舎
阿、椿東村
萩土原
本校寄宿舎
本校寄宿舎
本校寄宿舎
本校寄宿舎
本校寄宿舎

藤井藤江　阿、萩土原
藤本マサ子　仝、仝御許町　阿、萩川島
藤原トモコ　仝、椿東村
藤田楠緒子　仝、萩土原
古川愛子　仝、田万崎村　阿、萩石屋町
堀テフ　仝、萩東濱崎町
松浦マサ子　仝、仝東田町
三好榮子　仝、仝東田町
元山初子　德島縣德島市常三島町　本校寄宿舍
森光子　滋賀縣犬上郡青波村芹川　阿、萩江向
森屋春子　阿、萩茶屋町
山田富子　大、道村　本校寄宿舍
山根チヨ　阿、大井村　仝
山藤スエ子　仝、山田村
吉村コト　仝、萩熊谷町
渡邊房江　仝、椿村

本科第一學年（梅組）（五十音順）

阿武將子　阿、川上村　本校寄宿舍
內田恭子　仝、吉部村　仝
岡村與志子　仝、萩濱崎町
小川ナツヨ　仝、椿東村
大田溫子　仝、須佐村　本校寄宿舍
河村ヤキエ　仝、椿村
河村登美子　仝、萩町
河邊時子　大、三隅村　本校寄宿舍
川上富喜子　阿、萩御許町
神代照子　仝、萩町
河野ウメ子　仝、仝
金川鑑子　仝、仝土原
金子ヤヘ子　仝、仝江向
木原キヨ　仝、仝東村　椿東村中小畑
木谷美壽子　仝、萩堀內
木原ミドリ　仝、萩町川島
國重節子　仝、椿東村
後藤ミヨ子　仝、萩御許町
齊藤貞子　仝、仝川島　椿東村
末成キクヨ　仝、吉部村　本校寄宿舍
高橋ミチ子　仝、萩唐樋町
玉野富美子　攻、新庄村　椿東村鶴江
椿シズコ　阿、椿東村
長井龜代　仝、椿村
長村ウメ　仝、仝
中村信子　仝、萩町
西山文子　仝、山田村
原シゲヨ　仝、萩御許町
原~~壽子~~　仝、福賀村　本校寄宿舍
原田シヅ子　仝、萩土原

林露子　阿、福川村　本校寄宿舍
羽仁敏子　仝、萩北古萩
平井キミ子　仝、萩熊谷町
羽屋ハル子　仝、萩東田町
松浦シズヨ　大、倭山村　萩町平安古
松林英子　阿、椿東村
松岡綾子　仝、萩北古萩
濱部ミドリ　仝、椿東村
光井泰子　仝、萩濱崎新町
宮內鶴子　仝、仝熊谷町
三好民子　仝、椿東村
村上喜代子　仝、萩上五間町
本永繁子　仝、仝堀內
森尾シゲ子　仝、仝江向
山根キク　仝、萩町
山田文子　仝、仝
山田ヤヘ　仝、仝
山木房江　仝、仝
山木繁子　仝、萩町
芳野和子　仝、萩平安古

本科第一學年（菊組）（五十音順）

秋山千代　阿、萩上五間町
阿武スミ子　仝、福川村黑川　本校寄宿舍
石川ナツヨ　阿、椿村
石津和子　仝、萩河添
江川利子　仝、山田村
岡本トシエ　仝、椿村
岡田カツ　仝、椿東村
小野村アキヨ　仝、仝
小田シヅエ　仝、仝
大山アサ子　仝、椿村
久志アヤコ　廣島縣山縣郡上殿村　阿、萩江向
窪田智惠子　大、莖海村　本校寄宿舍
熊野ヒサ子　吉、山口町下宇野令　阿、萩江向
熊谷愛子　阿、萩今魚店町
佐伯尙子　仝、福川村
齊藤春子　仝、萩町
篠原光　島根縣美濃郡小野村　本校寄宿舍
澁見由久代　阿、椿村
鈴木嬉美子　仝、椿東村
鈴木百合子　仝、山田村
高橋クニ子　仝、萩唐樋町
竹內芳子　仝、萩町
竹下ハナヨ　仝、椿東村
田中キヌ　大島郡日良居村　阿、椿村
田中花子　阿、佐々並村　阿、萩上五間町
糧千千代子　仝、吉部村　本校寄宿舍

内藤靜江　阿、明木村
奈古屋イト　仝、萩米屋町
能美チヨ　仝、椿東村
林　吉子　仝、椿村
原田宣子　仝、萩江向
福谷政子　仝、仝津守町　萩西田町
福永ヒサ子　仝、仝橋本町
福山　壽　仝、椿村
藤本久子　仝、田万崎村　本校寄宿舍
藤田繁子　仝、椿村
堀　俊子　仝、萩江向
堀江貞子　仝、仝
馬來富士枝　仝、萩堀内
松尾豐子　仝、椿東村
三戸歌子　仝、山田村
宮内マツ子　仝、萩熊谷町
村上フサ子　仝、三見村
村谷チヨ子　仝、山田村
八幡靜子　仝、萩川島
柳田其子　仝、椿村
山根芳子　仝、仝
山本貞子　仝、萩濱崎新町
山本フユ子　阿、椿東村
横山ミサヲ　仝、川上村　本校寄宿舍

井上千代子　阿、福川村福井　本校寄宿舍
岩崎ムメノ　仝、山田村
岩崎サヨ子　仝、萩東田町
植村　親　仝、椿東村
岡　イセコ　仝、福川村福井　本校寄宿舍
岡　千歳　仝、紫福村　萩吉田町
大谷久代　仝、田萬崎村
河村綾江　仝、三見村
河村操子　仝、椿東
神田志都子　仝、萩堀内
河村スミコ　仝、椿村
桐山ミツエ　仝、萩平安古
窪田ヨシ子　大、菱海村河原　本校寄宿舍
黒瀨シズ子　阿、萩江向
國重米子　仝、椿東村
品川政子　仝、萩熊谷町
末成利子　仝、仝平安古
杉本スエ子　仝、仝平安古
櫛屋菊子　仝、仝江向
田村富貴子　山口縣下關市中之町　本校寄宿舍
田中文江　阿、椿東村
中村シズコ　仝、萩橋本町

實科第二學年（五十音順）

中津井節子　山口縣玖珂郡川越村
中村百合子　阿、椿村
野村キク　仝、萩濱崎
林　菊香　熊、勝間村呼坂
長谷キヨ　阿、萩津守町　阿、仝熊谷町
林　房子　仝、仝平安古
廣　トミ子　仝、仝濱崎町
平田タキコ　仝、椿村
平野ハナコ　仝、萩平安古
藤田千代子　仝、大井村
藤田トシコ　仝、椿村
藤原靜子　仝、仝
堀　幹子　仝、椿東村
松本ヒナ　仝、三見村
松浦八重　仝、萩東田町
松本秋子　仝、仝
松永歌子　大、向津具村
村木カツコ　阿、萩濱崎町
村木勝子　仝、仝堀内
村田トメ子　仝、仝東田町
安田貞子　仝、仝河添
山根チセ　仝、椿村
吉田ミホ子　大、三隅村
吉賀キヨ　阿、萩土原

吉武フク　阿、萩
渡邊カツ　仝、萩細工町
若松靜子　仝、萩東田町

實科第一學年（五十音順）

阿武幹子　阿、椿東村
石光明子　仝、萩五間町
石井喜美子　仝、萩東田町
石川靜子　仝、椿村
井上幸江　岡山縣上高梁町下町　阿、萩平安古
井上芳子　阿、萩東田町
大石ツヤ　阿、佐々並村　本校寄宿舍
岡本初江　仝、萩濱崎町
小方ヨシコ　仝、仝江向
金子タミコ　仝、仝川島
鹿島フジコ　美共和村　本校寄宿舍
桂木文子　阿、小川村　仝
金子フク子　仝、萩五間町
柁山操子　仝、仝川島
岸　ステ　仝、椿村
國吉喜代子　仝、萩
久保正子　大、菱海村　本校寄宿舍
小島秀子　阿、椿郷東分村
里川美智子　仝、奈古村　本校寄宿舍

坂本勝子　阿、明木村
下井志都子　厚、万倉村　阿、萩御許町田坂方
杉山キクエ　阿、萩米屋町
安田芳子　仝、仝御許町
田中壽子　仝、仝濱崎町　本校寄宿舍
田中フミ　仝、椿郷東分村
坪井多津　仝、山田村
都野美代子　仝、萩江向
時山マサ子　仝、山田村
永安シズエ　仝、奈古村
中原ハナコ　仝、福賀村　本校寄宿舍
中谷ヒサ子　仝、萩熊谷町
西田稔子　仝、仝川島
長谷川菊代　仝、仝濱崎町
波多野シヅ子　仝、仝濱崎町
林壽子　仝、萩
廣瀬ツル　仝、仝
藤山マスコ　仝、仝川島
藤本峰子　仝、萩米屋町
堀野富美子　仝、田万崎村　本校寄宿舍
松浦ツギ子　仝、大井村　阿、萩唐樋町高杉方
松本登美惠　仝、米屋町
松屋ヨシ子　仝、萩濱崎町
宮川ヒデコ　仝、仝橋本町
三浦ミツ子　阿、萩
森重ハツ子　仝、大井村
森ふさゑ　大、通村　阿、萩五間町三上方
山田トヨ　阿、萩
横山アサ　仝、大井村　本校寄宿舍
和田ふみ子　仝、福賀村　仝
渡邊豊子　仝、萩北古町

附記

一、右名簿中に相異の點あるか、又は今後氏名、本籍近況等に御異動ありたる際は速に南園會々報部へ御一報下されたし。

二、校外會員にして氏名の上に「◎」の符號なき方は校外會員會費金壹圓御送付ありたし。

但し校外會員會費と明記ありたし。

二、本會に記載されたる御芳名の頭部に（氏名の例に第何回卒業又は何年卒業と御附記下さる方は因者多き場合に於ける誤りなきことかと存じます）

三、校外會員にして氏名の上に「◎」の符號なき方は校外會員會費金壹圓御送付ありたし。

但し校外會員會費と明記ありたし。

會告

拜啓　御承知の如く近來諸物價騰貴の爲め南園會報の如きも少からざる印刷費を要し、本年發行の分にても郵送料を合すれば貳拾五錢餘に相成候處校外會員會費（卒業の際一人壹円醵出の分）の利息は僅に一人一ヶ年約五錢餘にすぎず候に付其の不足額は自然他より之を補はざるべからざる次第に御座候然るに校外會員遂年增加し會誌發行の費金隨て膨大致候に付本會現時の經濟狀態にては到底永く支へ得べき處に無之く候間本會の將來を考慮して止むを得ず次號より左記の通りに改め度存じ候間事情御洞察の上惡しからず御承知下され度爲其得貴意候

一、從來の如く種々の記事を掲載せる會誌は校外會員會費完納者に限り實費を以て希望者に配付す。會誌送付の希望者は本誌添付の振替貯金用紙を以て本校宛會誌印刷實費を送付せらるべし。

但毎年二月末日までに到着せざる時は次號の會誌は發送せず。

二、前項の會誌を希望せられざる方へは本會記事を主としたる報告書樣の簡單なるものを配付す。

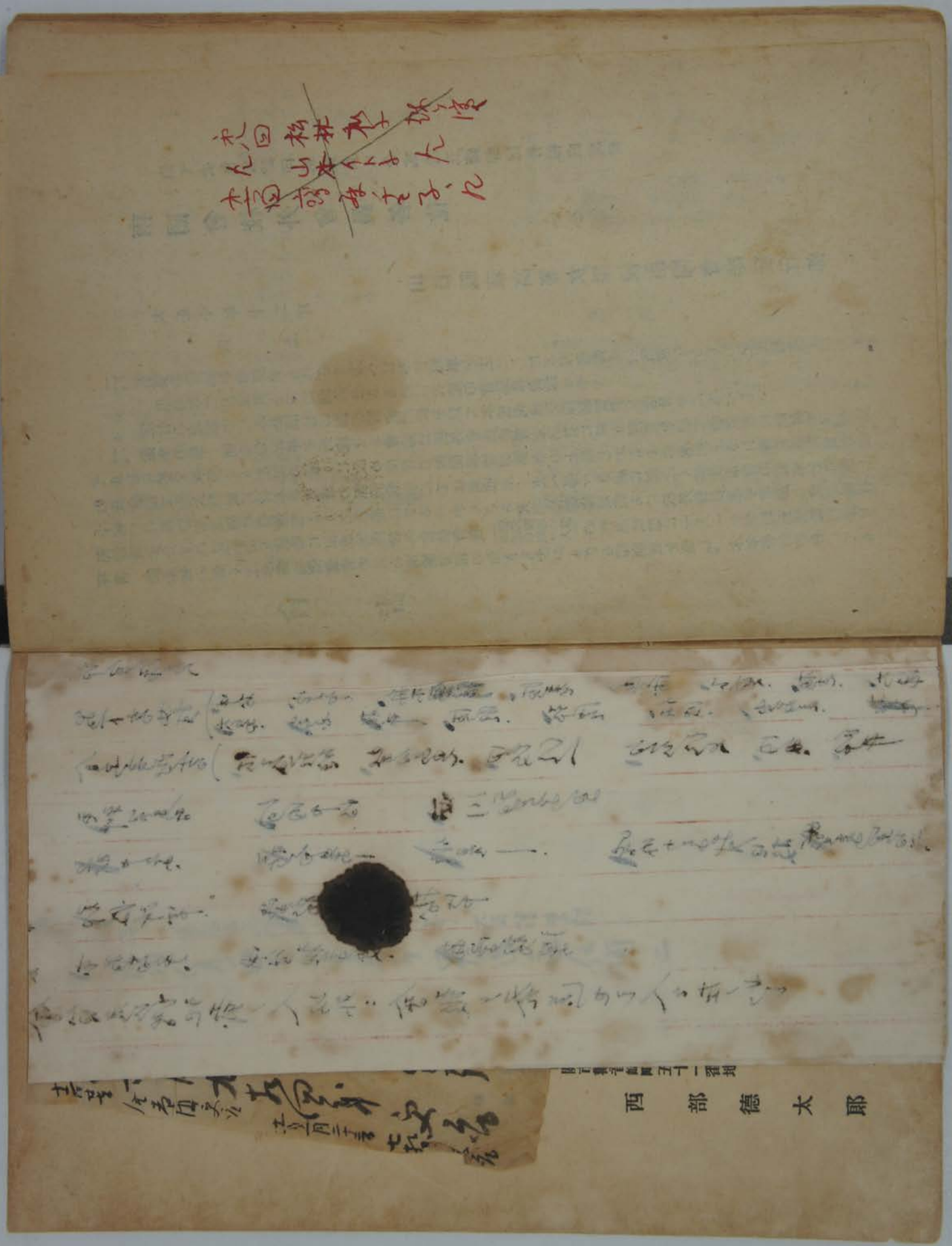
以上

大正十年十二月

山口縣萩高等女學校南園會誌發行部

南園會校外會員各位

追て次號會誌印刷實費は金貳拾五錢御送付相成度候



西部德太郎

大正十年十二月十五日印
大正十年十二月十八日發行

【非賣品】

發行所　山口縣萩高等女學校
南園會會報部

右代表者
山口縣萩高等女學校內
編輯兼發行者　池上岩太郎

山口縣下關市觀音崎町五十一番地
印刷所　西部紅文堂印刷部

山口縣下關市觀音崎町五十一番地
印刷人　西部德太郎